

# 清末小説から 134

2019.7.1

いくたびかの阿英目録24……樽本照雄 1

林訳『略史』の底本……神田一三 4

陸国飛『清末民初翻訳小説目録(1840-1919)』について——直視すれば……沢本香子10

林纾与苦海余生(刘锦江)往来考——从林纾佚文《〈佳儿佳妇〉序》谈起……王 玉30

《新小説》第三号の出版時間及其他……贾 立元36

意見拡散には相応の反応がある……樽本照雄41

清末小説から 3、10、42

★『劉鶚年譜長編』『林纾訳文全集』『曾樸全集』と刊行が続いています。今後の動向が楽園

清末小説研究会 日本〒520-0806 滋賀県大津市打出浜 8番4-202 樽本照雄方

## いくたびかの阿英目録24

樽本照雄

阿英目録は正しく書いたのに別の誤記がのちの目録に踏襲された例を紹介しよう。

翻訳者の名前だ。まぎらわしい漢字だといえようか。よく見れば別物だ。音も違う。しかし不注意に読み飛ばすと区別がつかない、か。

略号については重ねていう。無料公開している樽目録第10版(樽目十と略称)の「説明」を参照してほしい。

阿英目録の正しい記述を示す。君毅だ。なぜ正しいと判断するかは後に述べる。誤りは「君毅」と表す。

[樽目十]B0046\* 巴黎秘密案 2冊

(法) 佚名著 君毅訳 小説林社 光緒丙午(1906)

[阿英116]上記のとおり君毅訳

[劉晚221]君毅訳

[涵訳78]君毅訳、発行処を小説林訳とする、光緒丙午年

[版補下368]君毅訳、光緒三十二年

### 君毅か君毅か

本稿は阿英目録の記述を主として検討している。読者も理解されているとおりの正しい説明がほとんどだ。しかしいくつかの間違ひがある。この誤りを取り上げているばかりだと気が滅入ってくる。異なることにも触れて精神の平衡を保ちたい。

阿英目録、涵芬楼目録がいくら正しく記述していても、のちの編者が写し誤れば「君毅」や「君殺」になってしまう。「殺」すな、と言いたくもなる。編集した汪家焯は校正をしなかったのか。

該書ははたして小説林叢書に収録された作品であるのかどうか。阿英は記録しない。叢書名称については阿英は採録しなかった。

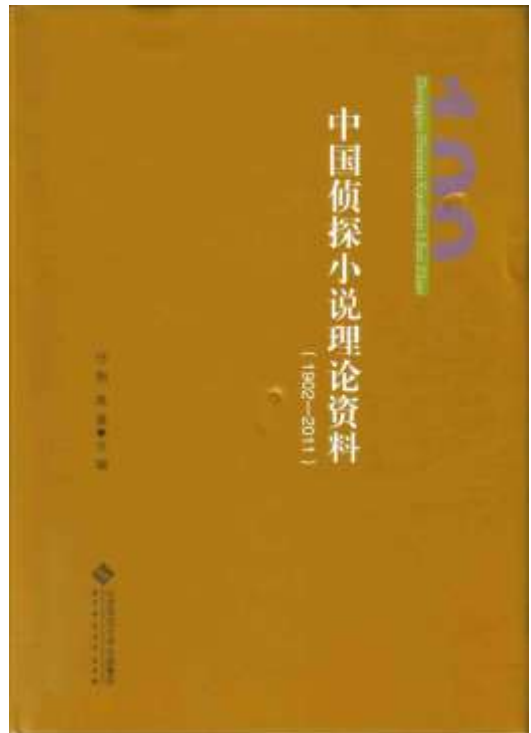
叢書目録には小説林叢書と明記してある。しかも「1906.7」と新暦年と旧暦月の混用(新暦旧暦混用)で刊年がわかる。

ところがこちらが間違いの「君毅」を記すものだからややこしくなる(一部省略)。

[樽目十]B0045\* 巴黎秘密案 上下冊  
君毅訳 小説林総編訳所編輯 上海・小説  
林社1906.7 小説林(叢書)  
[叢書134]上のおり君毅訳、小説林  
[漢訳2662](法)佚名著、君毅訳、1906  
(光緒三十二)7初版、叢書名不記  
[現代900]君谷[毅]訳、小説林叢書  
[大典112](法)佚名著、君毅訳。  
『小説林』第9期「小説林書目4」は君毅の  
み、丙午七月(1906)とする  
[編年160]君毅訳、七月[大康05]光緒三十  
二年版  
[編年③1065]上下冊、君毅訳、光緒三十二  
年(1906)七月出版  
[唐平1527]原著者不記、君毅、小説林1906.7  
[唐書5]原著者不記、君毅、小説林1906.7  
[韓08-309]君毅訳  
[劉晚221]君毅訳  
[慧敏446]君毅訳、七月、小説林(叢書)

こちらにも正しく君毅とするものが存在している。

任翔、高媛主編『中国偵探小説理論資料(1902-2011)』(2013)\*78から1件追加する。



[偵探601](法)FORTUNE DU BOISGOBEY著、  
君毅訳

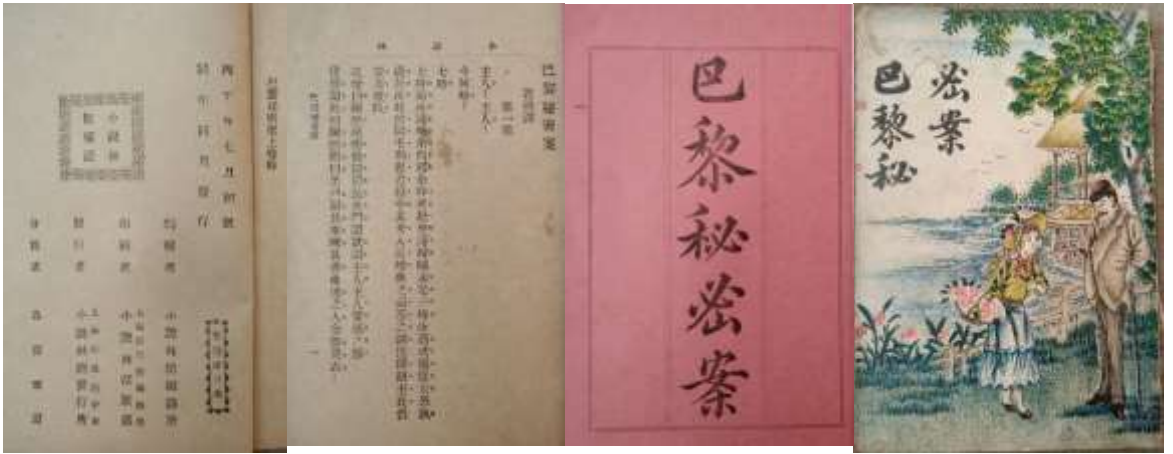
ほかには見ることができない原著者を明記している。独自に調査したのだろう。それにしても訳者を「君毅」と書いているが。

任翔らの資料が今まで知られていない著者を指摘する。もうひとつを簡単に紹介しておこう。

(英)小説家柯区勳爵著、天虚我生(陳蝶仙)訳『(附図 偵探小説)車窗幻影』(『小説大観』8集916.12)だ。著者を(英)SIR A. CUILLER COUCHとする。これは新しい。そう感じた。調べてみれば、『小説大観』掲載の前文に明記してある。どちらにせよ樽目録の記述不足を補うことができる。気づくのは、『シェイクスピア歴史物語』を書いたクイラー=クーチと同一人物のようだ。

さて『巴黎秘密案』だ。

実物を見ることができない。調べた限りでは図書館にも所蔵はされていないようだ。どうすれば確認することができるか。



『巴黎秘密』孔夫子拍賣網から

ウェブを検索してみると孔夫子拍賣網が見つかった。競売を実施したことがわかる。2012年に『巴黎秘密案』上巻1冊が出品された。最終的に140人民元で落札されたともある(追記: 2019年に見ると同本が転売されて3,000人民元で落札)。注目されるのは、表紙、扉、本文冒頭、奥付の写真が添えられていることだ。そこから引用して下に必要部分を示す。

奥付には、訳者名は記載されていない。しかし、本文第1頁に「君毅訳」と明記してある。これで確認できたとしていいだろう。

上の例では、君毅が間違いだと理解できる。では君毅がすべて誤記かといえ、これはまた別の問題だ。

民国になってから以下の翻訳が発表された。

[樽目録第6版]Y1424\* 意難忘 (UNVERGESSBARE WORTE)

(徳) 海則保羅 PAUL HEYSE 著 君毅訳  
『学藝』1-2号 1917.4-9  
HEYSE著[彙⑥1940][大典440]

こちらの君毅については詳細が不明だ。君毅の誤植であるとする証拠はいまのところ存在しない。このままに記述するのが妥当だろう。それほど単純ではない。 罫

【注】

78) 任翔、高媛主編『中国偵探小説理論資料(1902-2011)』北京師範大学出版社2013.3

『清末小説から』第129号 2018.4.1

- いくたびかの阿英目録19 ……樽本照雄
- 田漢漢訳『ハムレット』の底本1 ……荒井由美
- 『瑞士建国誌』について——漢訳「スイス独立史」  
……沢本香子
- 李伯元死後のこと(下)——『繡像小説』発行遅延との関係  
……樽本照雄
- 『比律賓志士独立伝』の底本2 ……沢本郁馬
- 文明戯「ハムレット」と『民国日報』の広告  
……神田一三

『清末小説から』第130号 2018.7.1

- いくたびかの阿英目録20 ……樽本照雄
- 2014年の林紓評価 ……沢本香子
- 田漢漢訳『ハムレット』の底本2 ……荒井由美
- 『比律賓志士独立伝』の底本3完 ……沢本郁馬
- 自爆する日中の研究者たち1——清末小説と林訳をめぐって  
……樽本照雄

次号の公開は2019年10月1日を予定しています

為 THE SECRET HISTORY OF TODAY. 81  
頁

## 林 訳『略史』の 底 本

神 田 一 三

林訳『略史』の底本問題があらたに浮上してきた。馬泰來の指摘(1981)がすでにある。底本は特定されているはずだ。はるか昔に解決しており疑問の余地はないとばかりに思っていた。

別の原書名がこのたび提出されたので検討する。

### 馬泰來說

林訳『略史』は初出が雑誌連載だ。(法) 亜波倭得著 林紓、陳家麟同訳「略史」(『東方雜誌』16卷1-9号 1919.1.15-9.15)である(本稿は英文底本を問題にしている。『略史』の商務印書館「説部叢書」「林訳小説叢書」には触れない)。日露戦争を背景にして欧洲、日本、満洲、ロシアを駆け巡るスパイA.V.(別名スターリング)の物語だ。

林訳についての馬泰來による記述<sup>\*1</sup>は以下のとおり。必要部分を引用する。

ALLA [E]N UPWARD (1863-1926) 一種  
094. <略史> THE PHANTOM TORPEDO-BOATS  
(1905) (中略)

林訳誤亜波倭得為法人。中村忠行誤謂原著

中村説<sup>\*2</sup>は誤りだとわざわざ書いている。馬泰來は実物で確認しているはずだ。彼の指す英文原書(略称『ファントム』。架蔵は LONDON: CHATTO & WINDUS, 1905)が底本であることを私は疑ったことはない。今まで別の書名が提出されたことはないのだ。それくらい馬泰來の調査は行き届いたものだと定評がある。

「潜艇魔影」と改題して『中国近代文学大系』11集27巻翻訳文学集二(上海書店1991.4)所収。これも原作を THE PHANTOM TORPEDO-BOATS としている。ほかの目録もすべて馬泰來說を受け継いでいることは明らかだ。

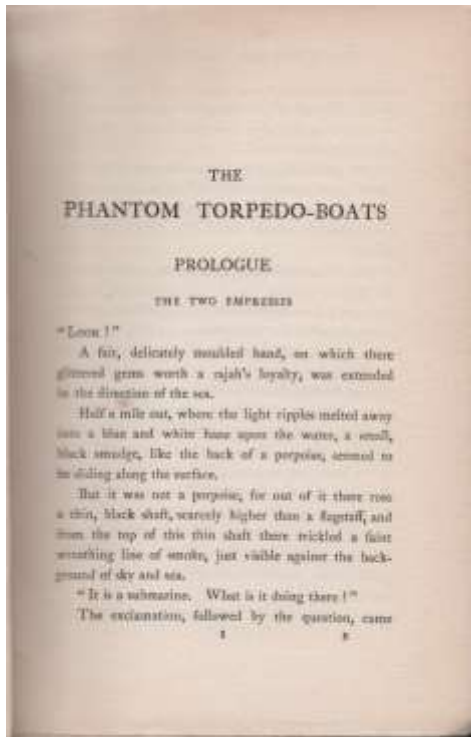
### 別版の提示

ところが別の説明が出現した。常方舟「遅到却不应缺席的正名」(2018)<sup>\*3</sup>である。該文章の主眼は書評だ。その書評と関連する部分は置いておく。そこに見える林訳『略史』の底本について示した箇所が興味深い。常方舟は馬泰來說には興味がないらしい。別の版本をただ提示しているだけだ。

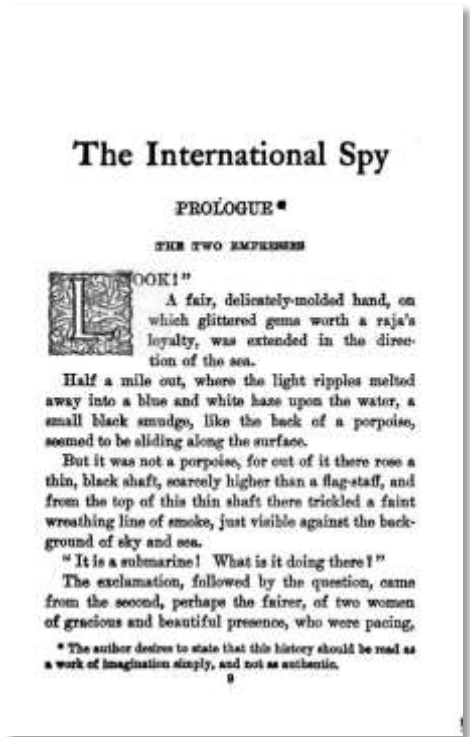
『略史』の底本について ALLEN UPWARD 著 “THE INTERNATIONAL SPY: BEING A SECRET HISTORY OF THE RUSSO-JAPANESE WAR.” (略称『スパイ』)とのみ常方舟は書いている。OPEN LIBRARY を見れば NEW YORK: G. W. DILLINGHAM COMPANY, 1905 がある。

英文『ファントム』『スパイ』と林訳の冒頭部分を別に掲げる。

なるほどほとんど一致している。「ほとんど」と書くのはわずかに1語の違いがあるだけだからである。その箇所だけを示す(下線筆者)。



『ファントム』



『スパイ』

東方雜誌 第十六卷 第一期 號尾

小引 略 史

一日有兩女師被此乘我同夕月台之上遠望海峽正  
是時聞一女以手拍海謂其同伴曰汝欲觀之此女指  
上加寶石戒指流輝射眼也其伴如言見海雲霧中  
有一黑點狀如海標之背標則非海標也其上乃有  
標頭頗突突然如香口此標也至此例為問者之  
狀本生美觀而此月台又為離宮至北方君王用以遊  
覽瀾海而築成爲飾觀則此二女亦非常人曾王后也  
此月台大似歌台下臨且浸乳我標則強舟遊艇皆  
出是間是爲北海海道可謂大西洋北海峽在右時有  
德舟之稱人行於北海間人出是間均爲疑難盜犯  
英法二國及意大利今則亦不無復獲地而德魯人  
之豪氣亦五解冰銷矣今茲海峽築此新宮即爲此則  
之巨鋪且各國王侯至是謂遊覽此二月中一人既

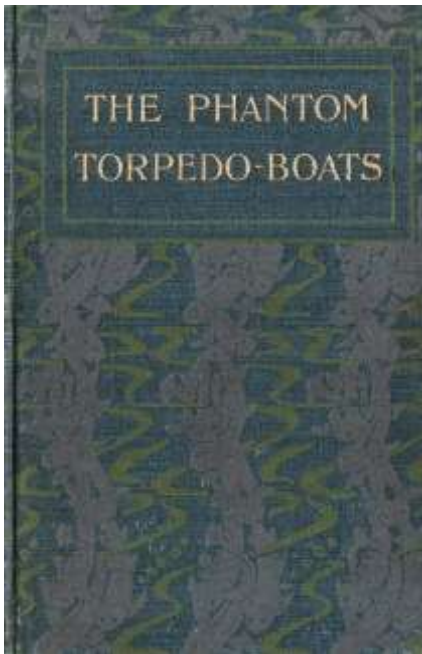
見潛水艇則大愕女則恬不己是二人者爲女兒弟  
二女均生北海之間各體於國王其國在地球中版圖  
幾佔其半人民亦多權利各岐而女兒弟之感憤如舊  
愈此時二人與攜手而立女兒弟亦曾見潛艇者去點靜  
索業已歸矣謂女弟曰此潛艇吾所未見然深知是害  
人之物爲患非輕今至此海峽何爲者以吾觀之必無  
善意果使吾國與人皆歸則由德海峽實處吾西必當  
以嚴兵絕之而布水雷不然密爲敵人闖入今此潛艇  
不知何國是必探我隱憂竊者水雷耳女弟聞言曰吾  
輩學師所論不能成爲實事吾思天下諸國兵力必  
無一人敢懸軍深入此間者將來司令之人必善於子  
非彼成爲其國官之子女兒點頭曰汝當知吾心之所  
懸難者何事果善子聽吾之言則戰事或息以吾夫生  
平兼以息事寧人爲上策吾即用是良或善子顯不見

一三六 櫻井林 譯

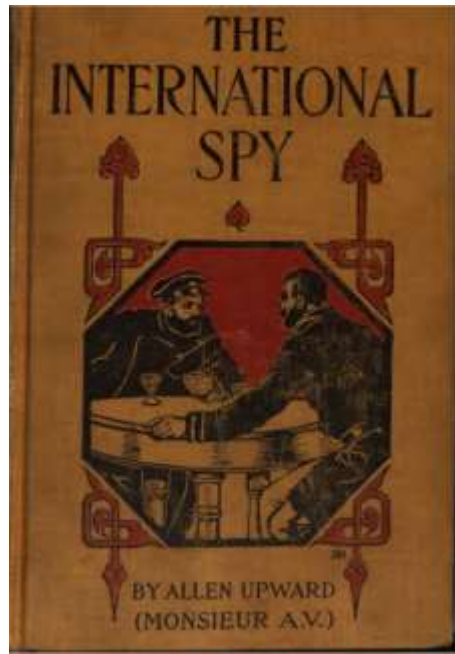
林訳『略史』



中島武訳表紙



『ファントム』



『スパイ』

【ファントム】 on which there glittered gems worth a raja's loyalty,

【スパイ】 on which glittered gems worth a raja's loyalty,

『スパイ』では“there”が削除されている。ここを見ればそれだけだ。

ほぼ同文の2本が存在する。馬泰来の記述は間違いなのか。問題はそれほど簡単ではない。

『ファントム』か『スパイ』か

ふたつの原著をあらためて並べる。本稿においてそれぞれにつけた略称もくり返す。

ALLEN UPWARD “THE PHANTOM TORPEDO-BOATS” LONDON: CHATTO & WINDUS, 1905  
『ファントム』

ALLEN UPWARD “THE INTERNATIONAL SPY: BEING A SECRET HISTORY OF THE RUSSO-JAPANESE WAR.” NEW YORK: G. W. DILLINGHAM COMPANY, 1905 (OPEN LIBRARYによる)

『スパイ』

『ファントム』と『スパイ』をみると冒頭は同一文だといってもいい。同一作品にふたつの書名がある。確認するまでは馬泰来の誤りだと即断することはできない。同文なのだから彼の堅実な調査があらためて確認されたということもできる。

なお上記原作の日本語訳がある。中島武訳『インターナショナルスパイ』（1931）<sup>\*4</sup>という。

英語原本2種の本文を比較検討した。判明したのは2本の大筋は一致していることだ。ただし部分的に少しの異同がある。つまり『ファントム』の細部を基本的に削除して『スパイ』になった。

問題はこれからだ。内容の主要部分は同じであるが細部が異なる2本のどちらが林訳の底本なのか。

『ファントム』になく『スパイ』にある

『ファントム』の本文を部分的に削って『ス

パイ』を作った。これが基本の流れだ。

ふたつある底本候補のうちのどちらか。それを特定するためにはどこを見ればいいのか。

林訳が『ファントム』を底本にしたばあい、原文を適当に取捨選択して漢訳しなかった部分が生じたことも考えられる。細部を省略した『スパイ』と区別をつけることができない。

英文原作2種類と林訳を比較対照するしかない。

組み合わせの問題だ。原作両者に存在する部分も林訳では省略した可能性もある。林訳は大筋を変更しないで原文にある描写をややもすれば簡略化する。共訳者が原書にもとづいて口語訳する。林紘はそれを聞きながら古文を使用して筆記した。共訳だから林訳には必ず共に翻訳した人物の名前が並置されている。古文だから必然的に表現は簡潔になる。林訳が独自に補足することはあまりないように思う。ゆえに原作両者がない部分を林訳が追加する可能性は排除していいだろう。

『ファントム』にあつて『スパイ』にないばあい。これがそのまま『スパイ』だから前述したとおり確定の条件にはできない。

『ファントム』になくて『スパイ』にあるばあい。簡略化した『スパイ』にそういう例があること自体があまり期待できない。もしそれが存在するとすれば林訳の底本は『スパイ』である確率はあがる。

異同箇所注目する。

『スパイ』第7章を例として提出する。『ファントム』になく『スパイ』と林訳にある箇所を見つけた。機関車で急行を追跡する場面だ(74-75頁)。

林訳の「略史」第7章(『東方雑誌』第16巻第3号1919.3.15。137頁下)である。

以下は『ファントム』にはない記述だ。【スパイ】【中島】【林訳】の順で比較対照する。



機関車で急行を追いかける

【スパイ】 Hour after hour we ruxhed across the blinding desert of snow, in which nothing showed except the flying disk of light disk of light cast by the engine lamps, and the red and white balls of fire that seemed to start, alight, and go out again as we frantically dashed past some wayside station.

【中島】次から次へ、我々は雪の沙漠を突進した。その中では機関車の探照灯に依る飛んで行く円板と、我々が狂気のやうに路側の停車場を通る時に灯火が点いて輝いてそして再び消えて行くやうに見える白と紅の灯火の球の外は何も見えなかつた。

【林訳】左右視但如電警。咫尺不相辨認。左右に目をやれば稲妻のように見えるだけで近くでもわからない。

【スパイ】 As the speed increased the light pilot engine, not steadied by a long train of

coaches, almost rose from the rails as it raced along.

【中島】客車の長い連結に依つて安定にされない軽い先駆機関車は速力を増すに従つて殆んど軌道から上つた。

【林訳】なし

【スパイ】Over and over again I thanked my stars that there were no curves to be taken, and I blessed the memory of that famous ruler wielded by the hand of Nicholas I.

【中島】私は鉄路が一直線である事を幾度神に感謝したか知れない。そしてニコラス一世が使つた定規の事を思ひ出して祝福した。

【林訳】鉄路既直。不復湾曲。幸無出軌之弊。鉄路は一直線であつてまったく曲がってはいない。幸いに脱線のおそれはなかつた。

【スパイ】Here and there, at some slight rise in the ground, the engine literally did leave the rails and skim through the air for a few yards, alighting with a jar that brought my teeth together like castanets, and rushing forward again.

【中島】時々地面が少し高くなつて居る処では、機関車は文字通り軌道を離れ、数碼の間空中を飛んだ。そして不意に私の歯がガチツとぶつかるやうな激動で下りて再び突進した。

【林訳】無論高原窪地。皆飛越而過。余齒為之相触作響。高くなつて居るところ、低地にかかわらずすべて飛び越して通過した。私の歯はそのためガチガチと音をたてた。

【スパイ】I clung to a small brass hand-rail, and strained my eyes through the

darkness.

【中島】私は小さな真鍮の手摺にしがみついて闇の中に眼を睜つた。

【林訳】則力挽小鉄柱。以目外視。力をこめて小さな鉄柱を引っぱり外を見た。

【スパイ】I could not have sat down, even had there been a seat provided for me—the pace was too tremendous.

【中島】私の為に設けられた席はあつたけれども、速力が余りに恐ろしいので坐る事が出来なかつた。

【林訳】雖為余備坐茵。余亦不能安坐。私のために座席が用意されていたがゆっくり座ることもできなかった。

【スパイ】I was tired and unwell, and a slight feeling of headache and sickness began to gain on me, engendered by the vibration of the engine, the smell of oil, and the fearful heat of the furnace.

【中島】私は疲れて気持ちが悪かつた[。]機関の震動と油の匂と火炉の恐ろしい熱の為に私は軽い頭痛と病を感じ始めた。

【林訳】然頗覺楚。頭岑岑然。且油煤之薰。火氣之蒸騰。余身困極。幾不能堪。頭は痛いし油と石炭のにおいと熱気が立ち上がり私は身体がどうしようもなくなりほとんど耐え切れなかつた。

【スパイ】It was some hours since we had started, but it was still pitch dark, with the wintry blackness of a northern night.

【中島】出発してから何時間が経つた。然し北国の夜はまだピッチを流したやうに暗かつた。

【林訳】幸已行数句鐘。而天尚沈沈而黒。すでに数時間は来た。しかし空はまだ重苦しく暗かつた。



【スパイ】 I leaned and gazed forward with dull eyes, when I was aware of two red sparks that did not grow and rush toward us as I expected.

【中島】私は凭り掛つて鈍い眼で前の方を見た。その時に別に大きくもならず、段々近づいて来る二つの紅い灯火に気が付いた。

【林訳】忽引首見兩紅光。向前而趨。非來車也。首をのばしてふと見ればふたつの赤い光が前方に向かっている。こちらにやってくる列車ではない。

【スパイ】 Were we slackening speed by any chance? I turned to the engine driver, and pointed with my hand.

【中島】速力を緩めたものだらうか？ 私は機関士の方を向いて手で指した。

【林訳】余謂司機曰。前面之紅光。果為何者。且小緩。私は機関士に言った。「前方の赤い光はなんだ。すこし速度を落とせ」

【スパイ】 The grimy toiler nodded. Then making a trumpet of his hands he shouted above the rattle of the wheels— / “The rear-lights of the express!”

【中島】死物狂ひに働いて居る人は點頭いた。それから彼の手を喇叭にして叫んだ。 / 「急行の後灯です」

【林訳】司機者以手作圓勢。置其吻。令声結而外達。告余曰。此即已開之快車。追及矣。機関士は手で円形を作って唇を当て声伝わるようにした。「これは先に出発した急行です。追いつきました」と私に言った。

アップワードは『ファントム』では描写しなかった細かい部分を『スパイ』で追加補足した。それを林訳は簡潔に漢訳している。

以上である。

## 結 論

林訳の底本はアレン・アップワードの著作で間違いはない。ただし本文がほとんど同じ『スパイ』と『ファントム』が刊行されている事実に着目すべきだ。林訳はその2種類あるうちの『スパイ』によった。馬泰来が指摘した『ファントム』ではない。 罫

## 【注】

- 1) 馬泰来「林紓翻訳作品全目」錢鍾書等著『林紓的翻譯』北京・商務印書館1981.11
- 2) 中村忠行「清末探偵小説史稿(2)」『清末小説研究』第3号 1979.12.1. 26頁
- 3) 常方舟「【書評】(樽本照雄<林紓冤案事件簿>) 遅到却不应缺席的正名」ウェブサイト『澎湃新聞』「上海書評」2018.12.27 電字版
- 4) アレン・アップワード著、中島武訳『インターナショナルスパイ』人格社1931.9.25 架蔵。

国立国会図書館デジタルコレクションにも収録する。該収録本には「昭和六年九月廿六日(手書き) / 安寧禁止(ゴム印)」の記述あり。扉は蔵書印、「海軍文庫」印など所蔵本(所蔵本は印刷)とほとんど同一。ただし「禁安1-304」の手書きがある。所蔵本にそれはない。

372頁 モンシユアー・エー・ヴィ記(扉: Monsieur A. V.) 注: ムッシュエーだろ  
一九〇四年一九〇五年 ザ・パーソン・パブリッシング・コンパニー発行  
一九〇五年 ジー・ダブルユー・ダイリンガム・コンパニー発行

国会本挿絵6葉。所蔵本にも6葉←原本電字版口絵(口絵目次にある。だが見当たらない)と本文に5葉

奥付は、著者: 中島武、発行所: 人格社、昭和六(1931)年九月二十五日発行

参照: 大塚奈奈絵「国立国会図書館所蔵『発禁図書函号目録』国会図書館2016.3.25 国立国会図書館デジタルコレクション所収。発売禁止であ

った/「安寧の部」受領年月日：昭和12.6.22/  
に記録あり。

【参考文献】

岩原康夫「エズラ・パウンドと中国詩：パウンド、アレン・アップワード、そしてH・A・ジャイルズの『中国文学史』」『工学院大学共通課程研究論叢』43 (2) 2006. 2. 28 電字版

水沢不二夫『検閲と発禁——近代日本の言論統制』森話社2016. 12. 19

陸国飛『清末民初翻譯小説目録（1840-1919）』について——直視すれば……

沢本香子

『清末小説から』第131号 2018. 10. 1

いくたびかの阿英目録21 ……樽本照雄  
莎劇のようなもの（上）——文明戯シェイクスピア ……神田一三

自爆する日中の研究者たち2——清末小説と林訳をめぐって ……樽本照雄  
田漢漢訳『ハムレット』の底本3完 ……荒井由美  
対陳家麟生平及其訳作的補遺与考証 ……王 玉

『清末小説から』第132号 2019. 1. 1

いくたびかの阿英目録22（改訂版） ……樽本照雄  
自爆する日中の研究者たち3完——清末小説と林訳をめぐって ……樽本照雄  
莎劇のようなもの（下）——文明戯シェイクスピア ……神田一三

『清末小説から』第133号 2019. 4. 1

いくたびかの阿英目録23 ……樽本照雄  
『林紘訳文全集』について——全集モドキでボッククリ ……沢本香子  
呉禱についての文娟論文 ……荒井由美  
陳大康『中国近代小説史論』の年表——『編年史』との関係 ……樽本照雄  
《廣肇周報》と林紘佚著《京華追憶録》… 王 玉

書名そのものが珍しい。陸国飛編著『清末民初翻譯小説目録（1840-1919）』（2018。『翻譯目録』と称す。略号は[翻目]）\*1である。



説明が必要だ。中国で刊行された書籍としては、という条件がつく。

従来は「晩清」という用語を使うのが中国学界の主流であった。阿英『晩清小説史』『晩清小説目』『晩清文学叢鈔』、劉永文『晩清小説目

録』などだ。たしかに劉樹森『清末民初訳外国文学研究報告』、于潤琦「清末民初小説書系」あるいは翻訳を含んだ付建舟「清末民初小説版本経眼録」シリーズなどがある。ところが該『翻訳目録』は「清末民初」と「翻訳小説」を結びつけている。中国において翻訳小説に特化した目録でしかも清末民初を名乗る単行本という形の刊行物は劉樹森(私家版)くらいのものだ。そう記憶する。一瞬、『翻訳目録』は日本で刊行されたものかと思った。

書店の広告には次のようにある。内容をよく要約しているように思う。

「2000種余りにのぼり近代(1840-1919)の翻訳小説目録についていえば目下のところ国内で収録が最も完備した目録の文献著作である。本目録の主要な内容は各小説の書名と部分的に原作名、作者、訳者と部分的に訳者の簡単な紹介、および発表された刊行物、刊年、出版社と出版年、小説類型の注記などの情報に言及し本領域の研究者および興味を持つ愛好者のために中国近代翻訳小説を研究するのに基礎的な研究材料と資料の見取り図を提供する〔(……翻訳小説目録,) 達2900多種、為目前国内单就近代(1840-1919) 翻訳小説目録來說收集最全的目録文献著作。本《目録志》主要内容涉及毎種小説の書名和部分原作名, 作者、訳者和部分訳者簡介、發表的刊物与刊年、出版社与版年、小説類型標注等信息, 能為本領域研究者和興趣愛好者研究中国近代翻譯小説提供基礎性研究材料和資料路線図〕\*2

この説明文は資料性のある刊行物について宣伝する時に出版社が常用する定型文だ。「最も完備した[最全的]」と強調する。最大級の賛辞を捧げる。興味深い。樽本照雄『新編増補清末民初小説目録』(第3版。齊魯書社2002。樽目三と称す)も中国で刊行している。それを視野に入れて中国国内で最高という。当然、樽目三を上回って収録していることを意味する。間違いはない。樽目三が刊行された2002年から

『翻訳目録』の2018年まで16年間に経過している。樽目録はその間途切れることなく増補修正している。収録規模は増大しているのだ。ならば中国ではどれくらいの新発見がなされているだろうか。該目録を見ればたぶんそれが判明するだろう。興味深い。

清末民初翻訳小説研究の論文には陸国飛の名前を見かけない。私が知らないだけだろう。ウェブ検索によれば(「作者簡介」でも同じ)大学教授で複数の著作を刊行している。やはり中国は広い。隠れた才能がこのように突然出現するからだ。豊富な人材が溢れている。篤学の研究者が清末民初翻訳小説の目録を地道に編集していたらしい。翻訳小説について中国学界の底力を見せてくれるだろう。最先端の研究成果を提出していないはずがない。出版が待ち遠しい。私は2冊の購入予約をいれて点検の準備をしたのだった。

届いたのを見れば『翻訳目録』を説明して清末民初に発表された翻訳小説全2,925種を収録するという。数字は編者の陸国飛自身が示した(後述)。書名は「清末」を使いその「序」では「清末(也即晚清)」と説明する。「跋」は1840年から1919年まで「即晚清与民初」(457頁)と書いて用語が安定しない。かすかな胸騒ぎが生じる。

『翻訳目録』の内容構成についてひと通りの説明をしたのちに内容を検討する。

## 分類している

該目録の特徴のひとつは作品を26種の小説類型に分類したことだ。分類できないものはそのほかとして「27」にまとめる。

それぞれの作品に使用された角書、題名などを手がかりにして陸国飛の判断で分けたという。あくまでもおおよその分類であって厳密なものではない。類型の内容については簡潔な紹介がそれぞれの冒頭にある。ひとつにまとめた上で書名の現代漢語音順に配列する。

作品内容によって細かく分ける編集方針だ。さかのぼれば作家の国別で分類した曾虚白らの『漢訳東西洋文学作品編目』(1929)を思い出す。あるいは林訳を「倫理之属」「社会小説」などと分けた朱羲胄の著作(1949)もある。馬泰來の林訳目録(1981)以来だから久しぶりの分類型目録といえる。

従来からある作品名の読み順、筆画数順、あるいは年表式ではないから書名索引が作成された。索引は確かに必須のものだ。

類型は以下のとおり(カッコ内の数字は収録作品数)。

1.政治小説(28)、2.科学小説(60)、3.偵探小説(538)、4.言情小説(404)、5.社会小説(167)、6.滑稽小説(67)、7.歴史小説(65)、8.軍事小説(62)、9.冒険小説(51)、10.童話小説(47)、11.神怪小説(45)、12.愛国小説(43)、13.義侠小説(43)、14.教育小説(32)、15.家庭小説(32)、16.伝記小説(29)、17.寓言小説(27)、18.倫理小説(24)、19.宗教小説(24)、20.筆記小説(20)、21.外交小説(19)、22.医学小説(20)、23.奇談小説(16)、24.虚無党小説(15)、25.勵志小説(10)、26.実業小説(9)、27.其他類型与未標注類型翻譯小説(1,031)。

合計2,928種にのぼる。陸国飛が「序」(2頁)、「跋」(457頁)において明記した「2,925」という数字と異なる。そうなる理由はわからない。

先走って説明する。『翻譯目録』を点検すると数の上でいくつかの不都合がある。

欠番(6-56)と重複(3-30と27-27、3-32と3-33、3-76と27-331、3-177と3-178、3-335と27-508、3-357と3-373、3-371と3-372、4-148と27-324、4-230と4-245、4-271と27-578、4-276と27-591、4-379と27-961、5-55と25-3、5-56と27-609、16-22と16-26、24-7と24-8、27-608と27-826の一部分)だ。計18種は全数より引かなくてはならない。

また同一題名であっても原作者あるいは訳者

が異なるから分離させるべきもの(2-60、14-31、15-29、27-143、27-310、27-336、27-340、27-731)がある。別名であるにもかかわらず1ヵ所に集めたもの(27-897)を加えた9種は全数に加える。

加減すれば全体から9種を引く。陸国飛の提示した「2,925」種ではなく「2,919」種になる。かなり微妙だ。誤差の範囲内といえなくもない。ただ収録数について編著者の把握が十分ではないことになる。

ほかに序、参考文献、書名索引<sup>\*3</sup>、跋がある。

収録作品数を上に出した。関連して先に少しだけ述べる。内容による大まかな分類で多い順に5位までを並べた(数は修正していない)。以下のとおり。

3.偵探小説(538)、4.言情小説(404)、5.社会小説(167)、7.歴史小説(65)、8.軍事小説(62)

清末民初に刊行された翻譯小説は主として探偵小説と恋愛小説が群を抜いて多数を占める。全2,919種のうち内容の記述がない(角書不記ということらしい)1,031種を差し引けば1,888種が残る。そのうちの探偵小説ならば約28%、恋愛小説は約21%だ。両者を加えれば約49.8%、ほぼ半数にのぼる。圧倒的多数だ。該書に収録した全作品に範囲を拡大するとそれでも約32%だから多い。

探偵と恋愛という大衆翻譯小説は当時の中国人読者から大いに歓迎された。それがこの数字にあらわれている。だが従来の研究者はこの現実を受け入れることができなかった。同時代に書かれた文学史あるいは中華人民共和国成立後に刊行された文学史において翻譯小説への評価は高くはない。研究者が頭の中で考える外国の「名作」と中国で実際に流行した探偵、恋愛では隔たりが生じるからだろう。

おおよそを紹介する——参考文献など

分類したうえで各作品について以下の記述となる。

分類番号と作品番号、翻訳題名と判明している原作をカッコ内に示す。原作者の国籍、原作者の漢字表記の後ろにアルファベット表記を添える。漢訳者、刊行物の出版時間(刊年)、新聞雑誌ならばその名称、単行本の出版社、出版時間、再版などの重版時期、作品によっては主として図書館などの収蔵場所、訳者紹介(簡介)などを含む。この簡介にだけは典拠を示している。

「序」1-2頁、「跋」457頁に陸国飛がいままで刊行された小説目録について述べる。わざわざ紹介しているから編集するに際し参照した資料だと理解した。

陸国飛がそれぞれの目録についてどういう把握をしているのかがわかる。ただし『翻訳目録』所収の各作品にどの資料を利用したかの注釈はまったく施してはいない。中国で従来から見る普通のやり方だ<sup>4</sup>。つまりこの書目を見ただけでは陸国飛が原物で確認したのかどうかはわからない。参考文献を引用しただけなのかそうではないのか区別をつけるつもりはなさそうだ。その点で樽目録とは異なる。

以下に編者名、書名とその略号(カッコ内の発行年も筆者)および陸国飛が下した評価を抜粋して要約する。「←」のうしろに翻訳小説の原作を掲げるものには「○」、掲げていないものには「×」を筆者が加える。ご理解いただいていると思うが略号を示した文献は樽目録において典拠として明示しているものだ。

○編者不記『涵芬楼新書分類目録』(〔涵訳〕1911) 翻訳小説は400種。価値がある←×

○阿英『晚清戯曲小説目録』(〔阿英〕1954) 1875-1911年の翻訳小説は608種(増補版1957では628件)。価値がある←×

○江蘇社会科学明清小説研究中心『中国通俗小説

総目提要』(〔提要〕1990) 翻訳小説は収録しない←×

○馬良春、李福田主編『中国文学大辞典』(〔大辞〕1991) 翻訳小説はほんのわずか←×

○北京図書館『民国時期総目録(1911-1949)』外国文学(〔民外〕1987) 専門の翻訳小説目録だが晩清(清末)時期の翻訳小説は未収録←×。所蔵についてB(北京図書館)、S(上海図書館)などの記号を用いる

○賈植芳、俞元桂『中国現代文学総書目』(〔現代〕1993) 1882-1916年の翻訳文学であって詩歌、散文なども含む←×

○陳鳴樹『二十世紀中国文学大典』1897-1929(〔大典〕1994) 翻訳小説を収録する←×

○陳大康『中国近代小説編年史』(〔編年①-⑥〕2014) 1840-1911年の翻訳小説についてかなり詳細に記述する。未刊原稿「近代翻訳小説編年(1840-1911)には952種を収録←×

○樽本照雄『清末民初小説目録』(増補版2002) 1902-1919年を収録対象とする。翻訳小説は4,974種。清末民初翻訳小説を収録してかなり完備した目録だ「〔較全的目録書籍〕」←○

略号で示したように陸国飛が言及する文献(未刊原稿と樽目三を除く)は樽目録では残らず参照している。見れば上に掲げられた目録のうち原作、原作者を明らかにし記述する努力をしているのは樽目録だけだ。しかも各作品に参照した文献をいちいち明記する。陸国飛はそこに気づかなかった。気づいたかもしれないが作品についての記述と誤解をした箇所がある(後述)。

それにしても参照したのが2002年出版の樽目三では古すぎる。手を加えつつ収録数を増加させて2018年に樽目録第10版(樽目十)を公表しているから特にそう感じる。

陸国飛は樽目三の翻訳小説を数えたらしく4,974種と具体的な数字を提示した。それと比較して陸国飛が提出した2,925種(実は2,919種)がそれよりも少ないのには理由がある。初版、

再版などの重版に関して記述が異なるばあい樽目三は別に項目を立てて区別している。そうするのが実物を反映して精確だと判断したからだ。陸国飛は同一作品だからと1ヵ所にまとめた。重版については注釈で説明したから総数が減ったというわけ。彼は「比較的正確に言えば[比較正確地説]」(序2頁)と書いている。自分の把握が樽目三よりも正確だと自信を示している。この段階で「大丈夫か?」と不安を覚える。陸国飛が樽目三を基準に置いているからだ。どこか怪しい。それよりも最新の樽目録では1840-1919年に限定すれば翻訳小説だけで重版などを含んで6,631件になっている。増補部分がかなり多いのだ。

編集方針が異なるから一概に比較することはできない。それでも『翻訳目録』の示す合計2,919種では樽目十の約44%にすぎない。ウェブサイトで公開している樽目録最新版は見えないのだろうか。胸騒ぎから悪い予感に変化する。

ここでも先回りして述べる。『翻訳目録』の全項目を点検した結果、樽目録のやり方で数えれば4,013件になった。最新樽目録の60.5%である。陸国飛が指摘した樽目三の翻訳小説4,974種と比較して961件も少ない。これは危険信号だ。あとから出てきた『翻訳目録』が樽目三よりも収録数が減っているのはどういう理由なのだろうか(後述)。

『翻訳目録』に掲げられた上の研究性文献がみすぼらしい。陸国飛は掲げていないがほかにも以下のような研究、目録がある。すぐに思い浮かぶ。

- (曾) 虚白原編、蒲梢(徐調宇) 修訂『漢訳東西洋文学作品編目(第一回)』真美善書店1929.9.28  
(表紙は『1929漢訳東西洋文学作品編目第一次』。後に張静廬輯註『中国現代出版史料甲編』1954所収)
- 実藤惠秀監修、譚汝謙主編、小川博編輯『中国訳日本書綜合目録』香港中文大学出版社1980

- 馬 泰来「林紓翻訳作品全目」錢鍾書等著『林紓的翻譯』北京・商務印書館1981.11
- 劉 樹森『清末民初中訳外国文学研究報告』1995 私家版
- 黒古一夫監修、康東元著『日本近・現代文学の中国語訳総覧』勉誠出版株式会社2006.1.20
- 韓 一字『清末民初漢訳法国文学研究(1897-1916)』北京・中国社会科学出版社2008.6
- 劉 永文『晚清小説目録』上海世紀出版股份有限公司、上海古籍出版社2008.11
- —— 『民国小説目録(1912-1920)』上海世紀出版股份有限公司、上海古籍出版社2011.12
- 渡辺浩司『清末民初翻訳短篇ミステリ論集』日本・清末小説研究会2010.5.1
- 張 治『中西因縁：近现代文学視野中的西方「經典」』上海社会科学院出版社2012.8
- 李 艷麗『晚清日語小説訳介研究(1898-1911)』上海社会科学院出版社2014.8
- 樊 偉平『小説林社研究』上下 台湾・花木蘭文化出版社2014.3
- 寇 振鋒『訳介と接受——中日近代小説生成时期的影響研究』上海訳文出版社2014.8
- 梁 艷『清末民初における欧米小説の翻訳に関する研究——日本経由を視座として』花書院2015.3.25
- 付 建舟『清末民初小説版本経眼録・清末小説卷』北京・中国致公出版社2016.1
- —— 『清末民初小説版本経眼録・民初小説卷』北京・中国致公出版社2016.1
- 康 東元『日本近現代文学漢訳全典』北京・外語教学与研究出版社2017.8

付建舟にはほかの経眼録が複数あるが省略する。それでも挙げ忘れていた文献があれば申し訳ない。とりあえず以上は日本、中国、香港、台湾で刊行された書物だ。基本的に翻訳小説の原作をできるだけ記述する。日本にいる私でさえ上のような研究、目録があることを知っている。中国に在住して翻訳小説目録を編集する陸国飛がそれらを知らないはずはないだろう。2018年の『翻訳目録』に掲げた「参考文献」

に以上の書籍に言及がないのはなぜなのか(参照した文献に抜けがあるのは努力不足ではないかという婉曲表現)。不安が増加する。

### 小説目録の変遷

時代を代表する小説目録にはそれぞれの特徴がある。先行する目録にないものを追加して深化する。進化といってもいい。以下において簡単に説明する。

阿英目録はそれまで存在しなかった清末小説目録だ。創作と翻訳に分ける。しかも目録編集の方針を従来からの主流になっていた単行本主義に加えて新しい雑誌主義を併用しつつあった。清末時期に登場した雑誌を採取対象にしていることを指す。実際に収録したのは一部の雑誌にすぎない。だがそれこそが阿英の着眼点の優れたところだ。阿英が最初に確立した空前で画期的な編集方針だといってもいい。民初を対象にはしていない。そこまで欲張る必要もない。以前は研究者の注目をそれほど引かなかった分野だ。清末部分で独立しているのがすばらしい。

馬泰来は林紓翻訳の原作を徹底的に追究した。それ以前のあいまいで誤った記述を訂正し新しく原作を発掘したところが新しい。林訳の底本については馬泰来目録を最初に見るのが定石だ。

劉永文の晩清と民国2種類の目録は、新聞、雑誌と単行本に分類する。単行本部分は樽目三からの複写である。だが新聞と雑誌については広く探索して詳細だ。そこがよろしい。ただし翻訳小説の原作には言及がない。

付建舟の経眼録シリーズは書影を添えて実物を確認しているのが特色だ。翻訳小説の原作については先行研究を参照しているのが信頼度を増す。

陳大康『中国近代小説編年史』(『編年史』と略す)全6冊は時期的には清末のみを扱う。新聞、雑誌、単行本、新聞広告まで採取する。実物で確認する努力をしてくれよう。参考文献を示していないからそう思う。複数の協力者を組織

して従来にはない大きさの規模で出現している。量的にいままでの目録を圧倒する。書いてある表記を忠実に採取することに主力を注いだ。だからだろう翻訳作品の原作を記述しない。たぶん後の研究者のために課題としてわざと残したのだと思う。あるいは別の研究成果を参考にすればいいという考え方もありうる。

樽目録は日本で編集するから直接確認することのできない作品の方が多い。確認努力には限界がある。これはしかたのないことだ。特に新聞については日本では揃わない。影印本がいくつか図書館に所蔵されるだけだ。小説雑誌の数は図書館にも少しはある。幾種類かの実物は自費で購入したりもした。だがこちらも数は知れている。ただ澤田瑞穂旧蔵『繡像小説』の総目録を1973年に公表したことに注目してほしい。これは世界的に見ても早いから珍しい部類に属する。中国を含めて多くの研究者が実物を見ていなかった時代の話だ。現在では影印本が出ているから誰もがそれを利用している。

日本において不備なのは単行本も同様だ。資料不足に加え個人ですべての作業をこなしている。どうしても限界がある。

しかしやり方がないわけではない。実物で確認できない作品についてはどうするか。複数の目録つまり2次資料から引用する。それが編集方針だ。

以前からそう説明している。これを読んだ中国人研究者のなかの幾人かは誤って理解した。つまり樽目録全体が2次資料を操作しただけで成立したと考えた。実物を見ていないと決めつける。これを普通に心理的自己投影という。自分が手に取らない資料は他人も見えていないと邪推することを指す。実物を見なければ記述できない発行の年月日まで明らかにしている箇所があることに気づかない。とにかく樽目録は信頼できないと言いたいらしい。そう考えるのは中国人研究者が提出した2次資料が信頼できないと言っているのと変わらないことにもなる。言

い換えれば日本人が作成した目録を貶めたつもりが結果として中国人の研究成果を非難しているのだ。そこまでの理解力が不足している。

目録を利用する側からいえば作品の実物に到達するための情報がほしい。1ヵ所にまとまっていれば便利だろう。現在の樽目録はあの巨大な『編年史』も必要箇所はすべて取り入れている。その結果をウェブ上で公開するのは研究者と情報を共有したいという願望があるからだ。探索の手がかりを提供することになればよい。

私が目録を編集するにあたって心がけていることを説明する。できるだけ実物に当たって確認したい(願望であって実現するには困難がともなう)。題名、原作者、訳者、出版社、刊年などそこに記述されたままを書き写す。それができないばあいは前述のとおりほかの目録、研究論文を参照する。それらの文献が新しい発見を盛り込んでいることが前提になっている。それらに対する感謝の気持ちをあらわすことが必要だ。すなわち作成した人に敬意を表して文献名をすべて表示する。当然のことだ。それをしない中国の目録を見かける。あたかも自分ひとりで発掘したかのように偽装する。それが判明した時、私は具体的に非難するように心がけている。実名を挙げず遠まわしに書いたのでは本人が理解しない。

中国で刊行されたある翻訳文学概論について書評を書いたことがある(遠まわしのように見えてそうではない)。その書物に出てくる作品をすべて検査した。間違いを書き連ねて公表した。非難する気持ちを込めたものだ。該書の修訂本が出た。中国国内で受賞したことが大書してある。著者はその後記において中国学界で高い評価を受けたと述べる。こういうあからさまなのはいかにも中国人研究者らしい。日本の『清末小説』第21号に評論文が発表されただけ言及する。たしかに非難も評論のうちだが、いかなものかと思わないでもない

樽目録が清末と民初を合体したのはそれ以前

に見られない新しい形だった。中国学界の認識では清末と民初の間には大きな溝、落差があったからだ。文学革命運動を高く評価するためには直前の清末小説を過小評価しなければならない。それで両者は長らく分断されていた。

樽目録は清末民初と称した1988年初版から実物を発掘しつつ諸研究と新出目録を吸収して増補修正している。現在まで、それぞれに独立して存在する曾虚白、阿英(清末のみ)、馬泰来、劉樹森、劉永文、付建舟、陳大康(清末のみ)ほかをひとつにまとめた。積み重ねて2018年に第10版を公表した。翻訳作品の原作は独自に見出したものに加えてほかの研究成果を参考にしている。参考文献はざっと数えて約880件を上まわる。この1冊があれば書物の発表履歴がわかる。それを目標にして樽目録は現在も増補訂正し続ける。

陸国飛が先行する目録を簡単に紹介したことを言った。紹介された文献には私の見るところ陳大康の巨大『編年史』6冊を含めて翻訳小説の原作者、原作品について注釈をつけたものはない。いくつかの例外は曾虚白、馬泰来、樽目録、韓一字、渡辺浩司、張治、李艶麗、欒偉平、寇振鋒、梁艶、付建舟、康東元くらいだ。その例外について陸国飛は樽目三以外に言及しないのが私の不安感を増大させる。

樽目三について陸国飛は「かなり完備した目録[較全的目録書籍]」と書いている。「かなり」という表現には幅がある。他と比較しての話であって絶対的なものではない。それにしても現在の第10版にくらべても規模は小さいのが事実だとくり返す。

今ではすでに古くなって不十分な樽目三だ。第4版から第10版までがウェブ上で公表されていることを知らないのだろうか。資料的に十分な把握をせずに『翻訳目録』を編集したことになるだろう。そこを憂慮するという意味だ。

着目点はひとつに絞られる。『翻訳目録』は従来目録をのり越える新しい発見を記述して



いるのか。陸国飛が独自に追加した新しい知見はあるのか。

後発の小説目録は先行する目録を内容的に凌駕する部分があれば刊行する意味がない。工具書だけでなく研究論文に共通する学界の常識だ。ここが評価の分岐点になる。

小説目録を作成する目的のひとつは作品そのものに到達するための手がかりを提供することだ。できれば研究の最先端が理解できるように記述が工夫されていけばいいことはない。翻訳小説についていえば当時は今と違って原作者、原作を明記していない作品の方が多い。翻訳の原作を明らかにすることが基礎研究の出発点だ。独自に追究して明らかにしているならばそれを追加することで後の研究をより深めることができるだろう。それが手がかりだ。記述が間違っていれば訂正する作業が必要になるのはいうまでもない。それを踏み越えて研究が深化する。

評価の基準はおのずと定まる。実物を反映して精確であってほしい。同時に最新の研究情報を取り込んでいけばもっとよい。それらが提供されているか。認識を広げ深めて研究論文につながる手がかりを与えてくれているのか。

くり返していえば知りたい作品が掲載されているか。その初出とその後の単行本化はどのように展開しているのか。それをたどっていくと作品の成立とその後の変化が把握できるのか。

小説目録について私が要求する水準は高い。目録は研究者しか利用しない種類のものだ。専門工具なのだから高度な到達点を求めるのは当たり前だ。あればいいというものではない。清末民初小説目録についていえば、ないよりマシという時代はとっくの昔に通過している。既存の目録を文献操作ただけで成立するものでもない。もしそうであれば役に立たない。新しい発見がないからだ。既存の目録で間に合う。理解してもらえと思う。

編集する側からいえば最高に完備した工具書を実現することが目標だ。それを目指す。その

先によりよい研究が出現するだろう。そういう視点で手元にある陸国飛目録を見つめる。『翻訳目録』は工具書として使用に耐えうるものなのかどうか。それをこれから検討する。

小説目録の編集についていくらかの経験を有する。また常用している私だからこそ気のつく点もある。それを記録するのが本稿の目的だ。

具体的に該目録の内容を紹介する。ご注意いただきたい。目録自体の記述が発行年月日に及んで詳細だ。それを校閲すると結果として説明が細部にわたる。私にとっては細かく検討することも研究の一環だ。嫌いなわけではない。だが一般読者にとって興味は薄いだろう。退屈かもしれない。最後の「結論」に跳ぶこともできます。

### 注目点と新しい指摘

『翻訳目録』は作品1種について雑誌初出からのちの単行本、その重版、叢書所収までをまとめて記述する。わかり易い。すっきりした記述に見える。ただしそれが実態を反映した説明であるとは限らない。

たとえば同じ作品でありながら版本によって示される原作者の漢字が違うばあいがある。柯南道爾(コナン・ドイル)とか柯南達利、科南達利、科南達爾ほかだ。微妙な違いだから見逃すこともあるだろう。当時において外国人名の漢訳は文字が異なっても普通のことだ。それを陸国飛は1カ所に集めて、ある作品では柯南道爾で代表させる。するとそれ以外で表示していてもそれは記述しないので実物から離れてしまう。いくつかの作品には注記する箇所もある。統一されていない。だが詳細を知らない一般研究者はその表面を見ただけで十分だと感じるかもしれない。詳しい説明がなされていると誤解する。

作品の数え方にも独特なものがある。作品集のばあいだ。作品5種を収録した書物は全体で1種と数える。さらに各作品を分離してそれぞ

れを独立させる。つまり5種に1種を加えて合計6種となる。その結果が前に示した陸国飛のいう2,925種(実は2,919種)となる。作品集を解体(バラして展開)するというその方法は樽目録を模倣したものだと思う。ただし『翻訳目録』は作品集を完全に解体してはいない。たとえば27-690「天方夜譚」(363-365頁)に収録された物語群はそこにまとめているだけ。各物語を独立させない。手を抜いたように見える。

一方で陸国飛は「訳者簡介」に力を入れたようだ。訳者について簡単な紹介文を挿入している。全108人(呉禱は10頁と233頁で重複する)を数える。小説目録でありながら訳者紹介を含んでいるのが異色だといえる。略伝を追加したのはほかの目録には見ることができない。単行本、研究論文、博士論文、ウェブ情報を含んで幅広く資料を集めてここだけは典拠を記録している。例をあげれば呉禱については日本の『清末小説』第32号を参照した。特徴のひとつだといっていいだろう。ここは強調しておく。いうまでもないがこの簡介は目録の記述とは直接の関係はない。

不具合がある。日本の徳富蘆花を訳者紹介に入れるのは疑問だ(267頁)。日本語の訳者だからここで説明するのはおかしい。徳富を漢訳者だと間違っただけの可能性はある。

関連してこういう箇所がある(本稿においてルビの「ママ」は樽目録に合わせて変則的に表示する)。21-16「一条鞭」(269頁)の著訳者として「(英) ALLEN UPWARD 著、徳富<sup>ア</sup>蘆花訳」と誤植し表示する。もとは訳者不詳だ。徳富蘆花はアップワード作品を「鞭の痕」と題して日訳した。そう樽目三に説明しているのにもかかわらず陸国飛はなぜだか徳富を漢訳者と誤解した。しかもそこに明記している蘆花の日本語訳を採取していない。

私から見ればほぼ新発見といっていいものがある。

2-24「科学家庭」(17頁)だ。原作者を(法)

蒙台とし訳者を包天笑(公毅)と記述する。掲載誌は『(商務)教育雑誌』とも示している。だが正確ではない。雑誌初出の題名が「科学者之家庭」であることを示さないからだ。こちらには原作者と訳者を「法蘭西文豪蒙台氏原著、天笑訳」としている。ところが陸国飛が作品名として使用している単行本の『科学家庭』には原作者の名前はない。両者が異なる表示を有していることをなぜだか記述しない。それとも初出から「科学家庭」と題していると推測したのだろうか。解説がないからわからない。

従来は包天笑の翻訳が2種類あると考えられていた。法蘭西文豪蒙台氏原著、天笑訳「科学者之家庭」(『(商務)教育雑誌』)と原作者不記、包天笑編纂『科学家庭』(商務印書館版「説部叢書」第3集第58編)だ。題名は似ている。しかし厳密に言えば一致しない。原作者があつたりなかったり。普通は別物だと考えるだろう。

では陸国飛の間違いかといえばそうではない。包天笑を蝶番にして雑誌初出の「科学者之家庭」(1916)と単行本の『科学家庭』(1919)がつながる。雑誌の出版元と商務印書館が重なる。陸国飛が題名の違う両者を比較対照したのかどうかは不明だ。「科学者之家庭」を出さなかったのが不備である。検討せずひとつに配置したのかと疑う。

私は『教育雑誌』と「説部叢書」の本文で確認した。両者の内容は同一である。

つまり雑誌初出では「科学者之家庭」と表示し、のちに「説部叢書」収録時には『科学家庭』と改題しフランス人原作者を削除したとわかる。陸国飛は本人が意識しないまま偶然に新発見をしたわけか。意識がなければ新発見であることも認識できないだろう。

包天笑に関連して陸国飛が樽目三を使用している根拠を3点示す。

2-43「顕微鏡」(22頁)の訳者を「天笑(包公毅)」と注記する。そのほかも同じ。樽目三では包公毅を使った。それに拠ったものと思う。

いくつかの問題点

気のついたいくつかを列挙する。これで全部ではない。細かいし長いと感じられるようであればとばしてほしい。

1-12「回顧」(4頁)と作品名にしている。これは間違い。「回頭看」が正しい。ところが索引424頁は誤った「回顧」ではなく正しい「回頭看」を出す。一致しない理由が不明だ。しかも『繡像小説』第25-36期の刊年をありもしない「1904年5月15日-10月23日」と書いて間違っていたと明らかになっている。樽目三では刊年にはカッコを使用して区別している。さらに陸国飛が参照したはずの『編年史』にも注記されているのだ。気がつかなかったのか。

1-17「経国美談」(6頁)の出版について「1883年3月-1884年2月、報知社出版(全2編)」と記述している。これは日本語原本のこと。漢訳についてのものではない。原作について樽目三の注釈があるがそれを見て勘違いしたらしい。間違う箇所ではないと思うが理解不能だ。

1-21「外交秘事」(7頁)では発行年月順に記述する(簡略化して示す)。すなわち1912.12が初版だと考えたのだろう。次の1914.6「小本小説」は当然「再版<sup>77</sup>」になるはずだと推測した。しかし小本小説には再版の表示はない。さらに1915.10.9の説部叢書第<sup>77</sup>2集90編は順序からいうと「三版<sup>77</sup>」になるとこれも勝手に想像したようだ。もともと三版の表示はない。またのちの説部叢書は「第<sup>77</sup>2集」ではなく「2集」である。ここを間違っている研究者は多い。

陸国飛が実物を見て確認しているのかどうかはあやしい。たぶん見ていないだろう。商務印書館版「説部叢書」の刊年表記が複雑であることを知らないらしい。存在しない版数を編者の勝手な予測で記入することは許されないことだ。書かれた記述のとおりに写す。記述のないものは書かない。目録作成の基本である。

説部叢書の入り組んだ刊年表示をひとつだけ



「説部叢書」本文



『教育雑誌』本文



「説部叢書」



現在の樽目録は変更して「(包)天笑」と表示している。細かいことだ。

2-50「新世界」(22頁)を掲載した雑誌『留声機』の期数と刊年に疑問符をつける。「1917年9月30日(?)或10月5日(?)、第7期(?)或第8期(?)」はそのまま樽目三からの複写である。

3-505「遊皮」(96頁)は原作を示さず日本語訳に言及しない。西<sup>77</sup>余谷、『偵探譚<sup>77</sup>』第1冊と誤る。[樽本901](97頁)と樽目三の頁数を示すのは典拠を出したのだろう。だがここ1カ所だけに明示するのは意味不明。原作、日訳はすでに明らかになっている。陸国飛の記述は古いままだから役に立たない。

例として出す。陸国飛の記述が一貫していない箇所だ。

3-195『華生包探案』(58頁)はホームズものの作品集である(『繡像小説』連載の「華生包探案」また『補訳華生包探案』の関係については省略する)。刊年の一部のみを抽出する。簡略化し比較するために出版社を記入した。

上海商務印書館1907.1二版/上海商務印書館1908.8五版/上海商務印書館1911.4再版  
(注:小本小説の刊年)/上海商務印書館1914.4再版、説部叢書初集第4編

注に示しているが「説部叢書」の刊年に「小本小説」が混入している。同一書名だから別叢書も混在させるのがよいと判断したようだ。中身が同じだからという理由かもしれない。しかし「小本小説」を注記し忘れているのはよくない。商務印書館が本社を置いた上海をかぶせている。ご注目いただきたい。もとの刊年記載が奇妙である。二版、五版の次になぜ再版にもどるのか。普通では理解しにくい。だがこれが実際の刊年記載なのだ。

その『華生包探案』に収録された3-496「銀光馬案」(95頁)を独立させた項目を引く。同じ『華生包探案』だから出版社および刊年は同じでなくてはならない。ところが次のようになっている。

中国商務印書館1907.1二版/中国商務印書館1908.8五版/中国商務印書館1914.1再版<sup>77</sup>  
/中国商務印書館1914.4再版、説部叢書初版<sup>77</sup>第1集第4編

先の『華生包探案』とそれに収録された「銀光馬案」の版数が一致しているところを見てほしい。ところが商務印書館の前につく「上海」と「中国」が異なる。「中国」商務印書館と表示する版本は実在する。主として「説部叢書」

元版に使われた。陸国飛はそれと結びつけて「説部叢書初版<sup>77</sup>第1集第4編」すなわち元版(初版は陸国飛の用語)の「第一集第四編」にしたようだ。しかしのちの『華生包探案』についていえば元版の集編番号を付与した版本はない。ここに見える「中国」商務印書館1914.4再版というものは存在しないのだ。つまり1914.4再版であれば陸国飛が先に記述している「上海」商務印書館の「初集第4編」でなくてはならない。明らかに不一致だ。陸国飛が実物で確認せず樽目三の記述を勝手にいじくって想像したのが原因だと考える。「中国商務印書館1914.1再版<sup>77</sup>」とあるのは「小本小説」の「上海商務印書館1911.4再版」を誤植したとわかる。

同一版本のはずが陸国飛の手になると記述が異なる不思議さだ。

いきなり細かい説明に入ってしまった。専門家を対象にしている本書評だから了解してほしい。

こういう例に出会って私の懸念は強くなる。翻訳小説目録として信頼できるのか大いに心配である。

2-60「造人術」(25頁)には英語原作にもとづいた日訳がある。それを魯迅(1905)と包天笑(1906)が別々に漢訳した。そのふたつを「造人術」でまとめて記述する。両者が底本として使用した日訳について記述しないのは不足である。

底本が同じならば1ヵ所にまとめるのが上の例だ。偶然に同一題名であるからそうしたのだろう。だが訳者が異なるから別項目にしたほうがよい。

それで統一しているのかと思えば違う扱いをするものがある。

「新飛艇」は2-46、2-47、2-48の3種として分割する。訳者が異なるという認識なのだろうか。しかし2-47は尾楷忒星期報社著、商務印書館編訳所訳と表示する。2-46も商務印書館の「説部叢書」に収録された同じ内容のはずだ。

見ればニック・カーター (NICK CARTER) ものだ。“NICK CARTER WEEKLY”だから2-47の尾楷式は尼楷式の誤植だろう(原本奥付が間違っている)。同一原作で翻訳題名も共通している。別立てにする必要はない。

たしかに2-48は「葛麗<sup>譯</sup>[斐]史著、天遊訳述」と著者を誤記して別作品である。原作が異なれば別項目にした。

一方で同一原作を翻訳題名が違うから別の場所に配置することもしている。

27-214「紅星佚史」(周作人と魯迅共訳。307頁)と27-298「金梭神女再生縁」(林紓と陳家麟共訳。316頁)だ。両者とも原作はハガードとラング共著の同一作品である。作品の読みによって別場所に分離したとわかる。また、「紅星佚史」には角書として「神怪小説」がふられている。ならば陸国飛の分類に「11.神怪小説」があるのだからそれに配置すべきだろう。不手際だ。

もっと奇妙なことがある。樽目三にはそれぞれに原作を明記している。だが陸国飛は後者27-298に原作を示さない。周氏兄弟訳は原作について樽目三から引用し、林訳については引用しない。同じ作品であるにもかかわらず扱いが異なるのはなぜなのか。林訳ハガードの原作を無視する理由がわからない。陸国飛のいわゆる不注意かもしれない。ここはどう見ても樽目三から複写すべき箇所だった。

言ってみれば同一項目に収納する、あるいは別に項目を立てるという原則が不明確なのだ(後述)。

写し間違いもある。

3-6「巴黎秘密档案」(27頁)をあげる。この作品は見かけない。その上に出した3-5「巴黎秘密案」と訳者を君毅<sup>譯</sup>と誤っているところも共通する。刊年が異なるだけで上と同じ作品だ。書名を誤植したと考える。

3-8「巴黎五大奇案」(27頁)を林琴南、魏充叔稿とする。題名は誤り。正しくは「巴黎四義

人録」である。おまけに翻訳小説ではない。

3-16「白蘭代<sup>譯</sup>[氏]奇案」(29頁)は「代」ではなく「氏」が正しい。誤りは劉樹森による。樽目三はそれに基づいて誤った。後に[劉民137]により慎初訳、『眉話』13号、旧暦乙卯10.1(新暦1915.11.7)であるとすでに訂正している。

3-17「白絲襪<sup>譯</sup>[線]」(29頁また357頁)は[阿英157]がそう誤記した。多くの目録が阿英に追従して間違う。正しくはカッコ内に補った「白絲線」である。

3-19「包探案」(29頁)はホームズもの4種と原作不詳の1種、合計5種を収録する。[阿英154]では「新訳包探案」となっている。阿英が時務報館訳、丁楊杜訳と記述するのは誤り。丁楊杜は文明書局の発行者であることを私は確認している。陸国飛が書いているように「訳者未題」である。ただし収録作品は『時務報』に掲載されているからそれを説明しないのは不親切だ。

2作品名に間違いがある(ママとする)。ところが作品ごとに別項目(3-500のように示す)にした箇所と索引では正しく表記する。[ ]内に示した。どこにでもある誤植だろうが提示場所によって異なるのは理解できない。

英国包探訪客<sup>譯</sup>[喀]迭医生奇案(ホームズものではない) → 別項目なし

英包探勘盜密約案 THE NAVAL TREATY → 3-500 (96頁)

記僞者復警<sup>譯</sup>[仇]事 THE CROOKED MAN → 3-211 (60頁)

継父証女破案 A CASE OF IDENTITY → 3-209 (60頁)

呵爾唔斯緝案被狀 THE FINAL PROBLEM → 3-177 (55頁)、3-178 (55頁)

最後の作品が3-177と3-178の2ヵ所に出てくる。同一作品だが3-177には張坤徳訳とし『時

務報』掲載だ。3-178はどういうわけか阿英の誤記した時務報館訳、丁楊杜訳を示す。

陸国飛の認識では張坤徳訳が『時務報』で先に公開されたのちに時務報館訳、丁楊杜訳で素隠書屋版に収録されたことになる。奇妙だ。訳者が一致しないではないか。整合性がとれていないという意味だ。

3-27「貝克偵探談」(31頁)の原文について間違っている。樽目三に依拠したからだ。

樽目三では、MATTHIAS McDONNEL BODKIN 原作で初編は“THE QUESTS OF PAUL BECK” 1908、続編は“THE CAPTURE OF PAUL BECK” 1909 とした。典拠を[中村S3-19]と示し中村忠行論文にもとづいている。樽目録第5版(2013)以後は中村の記述について次のように訂正した。「角書不記、「舟行紀」程」、続編を「“THE CAPTURE OF PAUL BECK” 1909?」とするのは誤り」

次の作品は同一書でありながらふたつに分離させる。

3-32「壁上血書」(32頁)の著者はもとは「徐大著」である。陸国飛はそれを次のように記述するのがまず奇妙だ。「(法)徐大(ALEXANDRE DUMAS, pere)著」。どうしてデュマがでてくるかという樽目三に「(劉樹森)は「即「続侠隠記」ALEXANDRE DUMAS, père “VINGT ANS APRES”」とする」とあるのを誤解したからだろう。日本語を理解していない。陸国飛は劉樹森の名前を引用しないから徐大をデュマに誤った責任は陸自身が負わなくてはならない。原作については樽目十で「[張治1709](CONAN DOYLE)福爾摩斯探案第一篇“A STUDY IN SCARLET”1887. 説部叢書第<sup>77</sup>二集九十九編。刊年不記」と注釈している。また説部叢書初集<sup>77</sup>第99編と誤る。

3-33「壁上血書」(32頁)は上の3-32と同じだ。異なるのは「説部叢書」第<sup>77</sup>2集第99編とする箇所だ。初集と2集に同じ編数で収録するのは考えられない。2集が正しい。

3-38「伯爵夫人<sup>77</sup>与美人」(33頁)は正確ではない。「伯爵与美人」だ。「劉徳隆訳」と誤記するのは資料を提供した人物と取り違えている。樽目三にはたしかに「(劉徳隆)」と注記する。これは劉徳隆の教示によっているという意味だ。また日本語の底本を引用しない。同じ誤りは27-711「鉄血姉妹」(367頁)にも見える。

16-27「婉娜小伝」(249頁)に劉樹森訳と記述して誤るのはこの劉徳隆のばあいと同じだ。

27-2(284頁)でもくり返す。

同様の例をもうひとつ示す。

27-501「奇竊」(342頁)に著者として「(日)渡辺浩司著(?)」とするのも誤り。原作者と情報提供者を混同していることに驚く。

27-879「夜未央」(387頁)に「万国美術研究社(飯塚容<sup>77</sup>)発行」とあるのにはあきれる。

樽目三には「本書的閲読方法」と漢語で訳した使用方法が図解されている。陸国飛はそれを読んでいないのだろうか。どうして間違えるのか私には理解ができない。劉徳隆、劉樹森、渡辺浩司、飯塚容らは現代の研究者として名が知られている。それをどうすれば原作者と取り違えるのか納得がいけない。陸国飛はこの研究分野について知識がないのかと疑う。

3-109「蜂蝶党」は天石訳で『揚子江小説報』第2-5期、宣統元年五月一日-八月一日(1909.6.18-9.14)とする。同じ訳者で同じ雑誌の5-27「蝶蜂党」、天石役、宣統元年(1909)があり期数なしとする。陸国飛のこの記載は樽目三に依拠している。追跡すると少しややこしい。

樽目三は阿英目録のとおりに記載していた。雑誌連載とは書いていない。これとは別に題名違いの「蜂蝶党」はFの項目に置き雑誌連載を第2-5期にしている。根拠は[大典189]と[史索-371]である。天石と掲載誌の『揚子江小説報』が共通する。題名が「蝶蜂党」と「蜂蝶党」でまぎらわしい。奇妙なことだと思う。だから樽目第4版では疑問を提出した。「[阿英160]題名違いではないか →蜂蝶党」と説明した理由だ。

問題を解決することができずにそのままにした。

たぶんこれが正しいのではないのかと思うのは陳大康『編年史』である。

年表の記述を追っていくと『揚子江小説報』は共通しているが題名の似通った作品が出てくるのだ。

つまり連載の途中で題名が入れ替わる。第1-2期は「蝶蜂党」だったものが第3-5期に「蜂蝶党」になったというわけ。

樽目録X(第7版)より現在の第10版までそのように記述している。やはり陸国飛が使用した樽目三では古いのだ。

3-120「福爾摩斯再生後探案」(47頁)は原作なし、光緒三十二年五月十五日<sup>77</sup>(1906)を刊年と誤る。この日付は『図書月報』第1冊の広告を指す。樽目三はそう説明している。だが陸国飛には理解できなかった。

贋作ホームズものを収録する。今まで原作が見つかっていない。中国人による創作だと考えていいだろう。次に掲げる。

3-138「福爾摩斯最後之奇案」(50頁)

3-198「黄金骨」(58頁)

27-550「三捕愛姆生<sup>78</sup>」(347頁)の初出は『申報』の「三捕愛姆生巨案」だ。陸国飛は「巨案」を書いていない。

3-337「深淺印」(80頁)

3-415「鉄宝匣」(85頁)

ホームズものの1作品について阿英目録が誤っていることを樽目三から指摘し続けている。

[阿英140]は『泰西説部叢書之一』に収録した作品に「紳士」と「海姆」を挙げた。これは間違いだ。正しくは「紳士克你海姆」である。上海図書館で実物を確認した。どういうわけか中国人研究者は樽目三のこの部分を信用しない。日本語を理解しないのが理由かもしれない。あいかわらず阿英目録にしがみついている。陸国飛もほぼ同じであるのには脱力感を抱く。

3-174「海姆」(54頁)は正しくないがその原作を“THE ADVENTURE OF THE REIGATE SQUIRE /THE REIGATE PUZZLE”とするのはよい。陸国飛が樽目三を典拠とした証拠である。樽目三以外には正しい原作を記した目録は存在しないことを知っている。

つづく記述からが奇妙なことになる。啓明社出版として「標“泰西説部叢書之一”」と説明するのはなにか。この「標」は角書を意味する。陸国飛は「海姆」が啓明社から単行本で出版されその角書が「泰西説部叢書之一」だと考えている。どうしてそう思ったのかは謎である。樽目三221頁で「正しい作品名は紳士克你海姆」と明記しているのを読まなかった、あるいは読んだが日本語がわからなかった。そうとしか考えようがない。

もうひとつの正しくない3-380「紳士」(80頁)では啓明社の単行本『泰西説部叢書之一』に収録されていると表示する。「海姆」とは説明が異なる。

不思議で奇怪なのはそれで終わらない。原作は“THE ADVENTURE OF THE NOBLE BACHELOR”だという。それについても樽目三628頁で「郭延礼が“THE ADVENTURE OF THE NOBLE BACHELOR”とするのは誤り」と指摘している。

ひとつの作品を分裂させしかも片方の原作を誤る。記述が混濁している。了解することはむづかしい。それだけではない。3-378「紳士克你海姆」(80頁)と別項目に立てている。啓明社と蘭陵社重版を掲げてどちらも角書が「泰西説部叢書之一」だ。

陸国飛の書き方では「海姆」と「紳士克你海姆」は単行本で、「紳士」は『泰西説部叢書之一』に収録されたことになる。どうしてそう考えたのか。私にはまったくわけがわからない。

おまけに27-667「泰西説部叢書之一」(361頁)がある。27はその他の分類だ。なぜ偵探小説からはずすのか。それには収録された作品と

して「紳士克你海姆」と正しく記述している。前後を見れば混乱しているではないか。

陸国飛自身が正しく認識していない。利用する読者は理解できずに困惑するだけだ。それとも編集協力者がいて作業を分担したのが原因か。「跋」458頁に数人の名前があげてある(後述)。その人たちは資料提供、助言、電腦入力したと書いてあるだけ。編集実務についての具体的な解説はない。だから最終責任は陸国飛自身にある。

陸国飛が樽目三を誤読している例をひとつあげる。

3-209「継父誑女破案」は『包探案(又名新訳包探案)』文明書局に収録されている。樽目三はその刊年を「光緒29(1903).12/31(1905).7再版」と示した。ここのアラビア数字は旧暦であると凡例で説明している。「/」の後ろにある「31」は光緒三十一年を意味する。だからこそ(1905)を補足したわけだ。

陸国飛はこれを「光緒二十九年十二月三十一日(1903)重版/1905.7再版」と解釈した。「12/31」の「/」を見間違った。「十二月三十一日」と記述したことから陸国飛の基礎知識が疑われる。旧暦に「三十一日」など存在しないことは常識だろう。陸国飛に旧暦の知識がない上に実物で確認せず文献操作だけを行なった結果だと思う。

それにしても間違いだと明記しているにもかかわらずそれを無視するのは私の理解をこえる。古い樽目三を正確に読むこともできずに典拠として使用している。痛ましくて見ていられない。もともとなった樽目三の方こそ迷惑する。誤った説明をしていると邪推されかねない。

このまま本稿を書き続けるのが苦痛に感じられてきた。誤記誤解誤植が連続出現するからだ。あまりにも多すぎる。

自分の目を疑いそうになる誤記がある。作品名「炸薬」の「薬」が27-974「炸薬」(398頁)になっている(誤記の「楽」は漢語の簡体字で

表記)。同じ398頁にあるほかの表記もすべて「楽」というのはどういうことだろうか。あまりのことに脳内から力が抜けていく。

3-512「玉虫縁」(97頁)の原作者はポー(EDGAR ALLAN POE)だ。著者表記は安介坡である。ところが陸国飛は愛倫坡と表示して異なる。愛倫坡は現在普及している一般的表記である。埃徳加・愛倫・坡であるのを流用したようだ。はたしてそれは妥当だろうか。ドイルの例と同じ。

周作人はポーの漢訳にはほかに安介・愛稜・坡(313頁)、亜倫坡(252頁)などを当てている。彼自身の中で必ずしも統一しているわけではない。しかし「玉虫縁」に限り周作人の使用した人名を無視して一般的な漢訳名を示す。これは工具書としての小説目録に適合しているだろうか。専門家が使うことを想定しているならばあくまでも初出の漢訳綴りを示すのがのぞましい\*5。中国での説明を見ていると「現在は〇〇[今訳為〇〇]」という書き方があるではないか。

3-525「偵探新語」(99頁)は短篇小説集だ。8作が収録される。それぞれは別に3-413「塔先之自縊」(85頁)のように項目を立てる。しかし「石炭窟中之偵探」は未収録。探偵小説だが「復仇」にはその他の項目27-143が振られる。しかも同じ「復仇」だというので作者と訳者不明の『改造』雑誌1919年掲載と一緒に掲げる。ここには説明が必要だがそれがない。陸国飛の書き方だと『偵探新語』(1904)に収録された「復仇」は1919年に『改造』に転載されたことになる。誤解を生む。

同じ題名だからといって1ヵ所に集めて誤る典型例を示す。掲載誌と発行年が羅列してあって読みにくい。そういう編集方針なのだろう。あまりにも雑然として理解がむづかしい。部分的に下線をほどこし青で彩色した(読点は置き換えている)。



27-310《決闘》

(俄) 泰来夏甫 (TELESHOV) 著、冷 (陳景韓) 訳。宣統二年十二月二十日 (1911.1.20)、宣統三年閏六月五日 (1911.7.30)、《小説時報》第8期、第11期記載。又、1916年9月1日、《新青年》第2巻第1号刊載、標“短篇名著”、署“胡適訳”。又、1917年、《留美学生季報》秋季号刊載、マ標“短篇名著”、署“胡適訳”。又、1917年9月、《留美学生季報》第4巻第3期刊載。318頁

結論をいうと同じ「決闘」ではあっても作者が異なる。青色で示した箇所の陳景韓訳は原作者はボアゴベイ (BOISGOBEY) である。それを黒岩涙香が日本語に翻訳した。その日訳にもとづいたのが陳景韓の漢訳だ。だからテレショフ (泰来夏甫) 原作の英訳を胡適が漢訳したものとは別物だ。しかも胡適訳が掲載された『留美学生季報』の秋季号というのを見かけない。誤記し重複している。

陸国飛はその区別をつけていないから驚く。樽目三にもとづいたであろうが出てきたものは樽目三とは関係がない。

周瘦鵑訳『情崇』(中華書局1917.4) という作品がある。『翻訳目録』では2種類の番号が与えられて2カ所に出てくる。ひとつは4-230「情崇マ」(131頁)だ。ママと示したように書名を誤植する。もうひとつは4-245「情崇マ」(132頁)だ。これも題名を間違える。どうして配置場所が離れているかという前者は誤った「崇」の現代漢語音のままにCを当てた。後者は「崇」と認識しておりSに置いたが漢字を誤記した。しかも後者の叢書名を「小説叢マ刊第31集」と書いて誤る。「小説彙刊」が正しい。続いて刊年を「1917年4日マ再版マ」にして月を間違い、ありもしない「再版」を独自に追加する。なにがなにやら。錯乱している。

『翻訳目録』の収録範囲時間は1840-1919年だと特定される。問題が生じるのは雑誌初出が

1919年で翌1920年に単行本が出た作品だ。陸国飛は1920年は対象外として採録しない。その原則を遵守している。たとえば27-279「焦頭爛額」(314頁)という林訳小説がある。『小説月報』の連載が1919年だからこれは収録する。ところが1920年4月に刊行された「説部叢書第3集第94編」は不採用だ。そういうものか。1919年までに限ると原則を定めてそれを厳守する。目録編者としてはその方が仕事は楽だ。いちいち考える必要がない。しかしそれでいいのか。目録の役割を考え直す必要はないのか。

翻訳小説の目録で1920年以後に刊行された「説部叢書」を外すのは納得がいかない。柔軟性を喪失した目録は役に立つのかという疑問だ。不思議なのは刊年を記載しない該書の「林訳小説叢書」版は収録している。どこかちぐはぐに感じる。商務版「説部叢書」第4集は第22編までが1921-1924年に刊行された。それを除外する翻訳小説目録を使いたいと思う人はいるだろうか。私は否定的である。

本文についてこれ以上紹介することはやめる。このように詳細に説明していくと本文は405頁に続くからどれくらい紙幅を必要とするかわからない。解説を中断する理由だ。

本文以外の部分にも触れておく。

「参考文献」の新聞12『申報』は「宣統三年」で1911年までしか採録しなかったように見える。『申報』は新聞9から12まで分割して示す。分ける理由ははっきりしない。『時報』も同じく新聞13から16まで区分けする。両者ともに採録数は多くない。

参考文献に示した雑誌はおおむね刊年不記だ。例外は24『小説月報』である。ただし同様に「1910-1911.12」とのみ示す。だが収録されている7-21「亨利第四紀」(187頁)は『小説月報』第7巻第2号が1916年2月25日だからそれを越える。だいたい『翻訳目録』の表題に「1840-1919」と特定している。参考文献もそれに合わせた表示であるべきだ。

かいつまんで示した。あとは結論を述べることにする。

## 結 論

中国ではいままで見たことのない書名で『清末民初翻訳小説目録』だ。翻訳小説の専門目録として中国最初ではないにしても希少の部類に属する。出版社の宣伝文(内容提要)は「もっとも完備した」と強調した。従来から蓄積してきた研究結果が出てくるに違いない。私はそう思った。刊行されるのを待ち望んだのは前述のとおり。

中国人研究者によってどのような新しい発見が記録されているのかとページ順に読みはじめた。私にとって小説目録は必要な時にひもどくものではない。第1ページから読むものなのだ。すると驚きの連続である。よい方向ではない。全項目を細かく見ると悪い箇所ばかりが目につく。私が少なくない時間を費やして行なった照合作業の到着点が徒労感と虚しさだとは予想もしなかった。落胆しか感じるができない。

該目録の編著者陸国飛は翻訳小説の実物を見ていないことが明白だ。再編集するために使用した資料は樽目三のみである。ほかの参考文献を参照した形跡がない。2018年に出た『翻訳目録』の中身は樽目三が刊行された2002年で時間が停止している。16年という経過時間は存在しない。その間に生じている研究の発展とはまったく接点がないのだ。取り残されたまま。しかもその事実気づいていない可能性が高い。つまり後の版本が増補訂正して複数がウェブ上で公開されていることを知らないらしい。がっかりする。

利用者からすればいやおうなく2002年の過去へ強引に引き戻されることになる。それだけならまだましといえないこともない。不都合が出てくる原因は陸国飛が独自の考えで翻訳小説を類型別に分類しなおしたことだ。具体的な編集作業に取りかかった時、そこにある樽目三の

記述を勘違いする、誤解する、見誤る、取り違える、置き間違える、誤写する、誤入力する、いくつかの項目で重複させ分離すべき作品を同一視した。樽目三から離れて齟齬が生じる。さらに現在では誤りだと判明している記述をそのまま踏襲する。また陸国飛は樽目三を正確に読みこなしていない。注釈にある日本語を理解しないのである。さらに重版(特に商務版「説部叢書」)について妄想する箇所が出現している。その結果、改悪という最悪の形で姿をあらわした。悲惨な内容になってしまったのには言い訳ができないだろう。

重大な不具合があることをいっておかなくてはならない。樽目三に記載されているにもかかわらず陸国飛は日本原作、日本語訳について複写しない。そこにある日本の雑誌、単行本の出版社、刊年を書き写していないという意味だ。

問題は小さくない。なぜなら陸国飛自身が「序」において次のように指摘しているからだ。「中国の最も早いロシア名家の名著で比類なき多数は日本語翻訳を通じてあらためて翻訳したものだ[中国最早翻訳の俄羅斯名家名著絶大多数は通過日訳重新翻訳的]」(4頁)と述べる。戩翼翬、吳禱をあげる。フランス原作については転訳した盧籍<sup>77</sup>[藉]東、梁啓超、包天笑、魯迅らも提示する。さらに「日訳本から転訳することは清末と民初という時期の翻訳小説ではほとんど一大特色にまでなった[従日訳本転訳在清末与民初時期的翻訳小説中幾乎成了一大特色]」(5頁)とまで説明しているではないか。それくらい重要だと理解している日本語訳について樽目三にある記述を転写していない。認識と実際の行動が一致しないのが奇妙である。大きな矛盾だ。

誤記誤植と写し間違いが多い。

誤りのひとつを示せばこうだ。127頁に書名で『欧美名家短篇小説叢刊』とあるべきところを『欧美名家短片<sup>78</sup>小説叢書<sup>79</sup>』とする。「篇」と「片」は同音だが声調が異なる(外国人が漢

語音について中国人に文句をつけるのはいかがなものかとは思う。「刊」と「書」ではまるで違う。電腦に入力するとき打ち誤ったのだろう。だがその1行上には正しく記述しているからわけがわからない。校正をしなかったようだ。

もうひとつは首をひねる間違いだ。清末小説では著名な呉趼人に奇妙な漢字を当てる。

呉研人(39、108、142、266、301、379、380頁)は中国でよく見かける普通の誤植だ。以下が不思議なもの。呉妍人(148頁)、呉堯人(301頁)、呉沃堯人(388頁)、呉鉞人(252、303、321、325頁)。清末小説を扱う研究者がこれほど多様な誤記をしているのは珍しい。私は見たことがない。

『繡像小説』の刊年はほぼ誤っている。これでは信頼することは不可能だ。最初に触れたが索引に示すページ数がズレて間違っているものはいくつも見える。

『翻訳目録』にはそれでも新発見がふたつある。27-610「世界著名之大騙子」(354頁)の原作者加蘭丁倫に HAMLIN GARLAND と追加した。ただし説明はない。またそこまで書きながら原作は明らかにしていないのが不可解だ。27-631「霜刃碧血記」(356頁)の「1914年10月、《時報》開始連載」は、もとづいた樽目三には掲載がない。樽目五(2013)から[劉民322]の記載を引用して「『時報』1913.8.14-1914.1.8」を追加した。それにしても陸国飛の示す「1914年10月」とは隔たりがある。

それ以外の新しい発見はないと同じだ\*6。これも欠点に数えられる。

陸国飛は参考文献のひとつとして樽目三をあげた(408頁)。多数の文献に混ぜ込んである。あくまでも参考書のひとつにすぎない。そうとしか見えない書き方だ。「序」(1-2頁)と「跋」(457頁)において内容を少しばかり解説したがそれだけのこと。陸国飛の施した工夫だと思う。樽目三に全面依拠しそれを再編集のうえ『翻訳目録』が成立したなどと説明する考えは

毛頭なさそうだ。陸国飛自身にしてみれば特に記述する必要もない中国学界では普通で従来どおりのやり方だという認識なのだろうか。もっとも樽目三に全面依拠したと書けば、それはそれで別の問題が生じる。書けるはずもない。

私は『翻訳目録』の全ページを校閲した。その結果わかったのは、何度でもいう、陸国飛が樽目三を基本的に引き写したという事実だ。類型に分類したところが異なるだけ。『翻訳目録』の収録作品が樽目三の範囲内に限定される理由である。それを超えることができない。追加項目が発生しないことからわかるだろう。しかも過去の誤りを訂正もせずそのまま保持して平気であるのがなんともなさけない。

該目録が陸国飛「編著」と称する理由を推察する。「訳者簡介」が「著」だという考えかもしれない。ただし典拠資料を編集しただけという見方もできる。それを除いた目録本文は樽目三から作品を取捨選択し統合のうえ再配置したから「編」になる。それだけにすぎないと説明するのは気が重い。著者とその関係者の感情的反発を招くからだ。

陸国飛が樽目三の翻訳小説を数えて示した4,974種だった。だが樽目録の方法を『翻訳目録』に適用して算出すれば4,013種という数字が出てくる。4,974種から4,013種に減少したこの数字こそが樽目三を縮小した事実を明らかにしている。樽目三の刊行後に新しく増補した多数の翻訳小説は『翻訳目録』には反映されていない。その痛ましい実情に私は目を覆いたくなる。正直な感想だ。

翻訳小説目録を作るためだけに編集したように見える。どういう意味か説明する。

私の考える翻訳小説目録には追加記録してほしい項目がある。原作品、原作者をできるだけ明らかにする。翻訳小説の目録としてはそこが最終目的だ。それを起点にして研究が始まる。あるいはそれを終点にして研究が成立する。最新情報を注入すべきだ。すべては研究を深化さ

せるためである。

そこまで踏み込んだ目録でなければ今後の研究に役立たない。原作のどこまで明確になっていて何が不明のままなのか。これを区別しなければ意味がない。ここが重要な点である。いうまでもなくそれを実現するためには自らが汗をかく(現物を探し出して手に取る)必要がある。その認識が陸国飛にはないようだ。とくに奇妙なのは樽目三に記述されている原作を無視していることである。さらに新しい第10版を知らない。だからつぎの研究につながらない。『翻訳目録』は結局のところ混乱を振りまいて終わり。目録編集の目的を陸国飛は見失っている。

前宣伝がよかったから2冊購入するくらい私は期待したのだった。

表面だけをなでれば手間ヒマかけているように見える。作品の発表年月日まで踏み込んだ詳細な記述がつかない。陳大康『編年史』などを除いた一般の目録は日にちまでは書き込まない。序8頁、目次2頁に加えて本文、参考文献、書名索引と跋で458頁(全468頁)の立派な目録だ。普通の読者ならば一目見て信用するかもしれない。

しかし私が樽目録を手元において比較点検すると間違いと不足部分が出てきて多すぎる。作品を実物で確認している様子をうかがうことができない。自分で調査せずすでに古くなっている樽目三を指先でこねくり回して作成したことがわかる。陸国飛にとって目録編集は指先作業でできる種類の安直なものかといぶかりア然とする。基本のところ目録そのものを馬鹿にし軽視蔑視している。率直に言ってそう感じる。『翻訳目録』を検査した結果私は以上のように理解した。失望とはこういうことをいう。

目録を編集する時にはできるだけ実物で確認するのが基本だ。阿英目録が長年にわたって信頼されたのは彼が実物を所蔵していた事実を背景にしていたからだ。実物を手元において小説目録を編纂した。それが信用度を高めた理由だ。

陸国飛はそれを理解していない。小説の実物にあらずとも既存のものを再編集すればたやすく1本が成立すると考え実行した。目録作成という重要な作業に対して陸国飛のとった姿勢は極めて手軽で安易だ。研究者として誠実な態度ではない。はっきりいえば陸国飛は目録編集という仕事を根底のところ侮蔑侮辱している。そう評しても過言ではない。

該目録には「教育部2013年度人文科学研究规划基金項目(項目号:13YJA870015)研究成果」と表示される。陸国飛は公的資金を申請し合格したことがわかる。中国教育部が是認した人文科学研究である。その結果こうして出版されてもいる。中国出版界が許可した刊行物だ。

途中で何度かの審査を経ているはず。ところが審査員たちは誰も『翻訳目録』が樽目三から基本情報を劣化複製して成立したことに気づかなかった。編集協力者(いたとして)もそうだろう。日本とは異なる中国の学界、出版界の構造を考え合わせると陸国飛個人の問題にとどまらないことを証明している。

上海書店出版社編『林紓訳文全集』全47冊(同社2018)を評して「全集モドキのボッタクリ」という語句があった。それにならえば『翻訳目録』は「目録モドキ」である。「目録のようなもの」という意味だ。目録のように見えて真の意味で翻訳小説目録ではない。先行する2002年の樽目三をのり越える箇所がない。新しい記述説明がないに等しい。写し間違いが多い。もとの誤りを無批判に複製してそれを訂正する気もない。落胆のあまり同じ語句の繰り返しになる。ご了承いただきたい。「内容提要」にある「最も完備した[収集最全文録文献著作]」と考えるならばそれは間違っている。

2018年に出現した『清末民初翻訳小説目録』と『林紓訳文全集』は、中国における翻訳小説研究の現況(の一部分)を象徴しているように思う。翻訳研究について学界がかかえる手詰まり感である。絶望的とさえいえそうなやつつけ

仕事感がすさまじい。「やっつけ仕事」とはそこにある資料を適当に参照し粗雑に処理して書物をでっち上げることをいう。その背後にあるべき研究の真摯な積み重ねが存在しない(ご注意いただきたい。上記2種類の書物についてのみ言っている。別の研究成果は対象にしていない)。

おおよそ100年にわたり林紓批判を継続してきた。翻訳文学は中国文学ではないと長らく軽視してきた。今急に従来の判定を覆そうとしても、もともと準備すらされていない研究結果が出てくるわけがない。そこをあえて刊行したという見方もできる。だからこそ深い虚無感が露呈している。

陸国飛が蓄積してきたはずの研究の集大成がこの目録にほかならない。出版されるのを日本で待っていた『翻訳目録』だった。なんども書くのは私の期待がそれほど大きかったからだ。中国学界の底力を見せてくれると信じて疑わなかった。それを精査した。判明したのは基づいた樽目三から下方に離脱し内容が不足して間違いだらけのどうしようもない中古物件という事実だ。2018年の刊行だがその中身は2002年モノの劣化版である。まさかと思われるかもしれない。しかしこれが真相だ。研究者が依拠すれば間違った方向に導かれるであろう。あるいは混乱状態に陥るだけ。利用するには適さない。

「跋」(458頁)に韓偉表、朱峰、尹景書、姚艷波、柳強明、陳福康、上海交通大学出版社の名前を記録している。陸国飛はその存在を明らかにして感謝の気持ちを表した。該目録の編集方法に少しの疑問も感じずその結果にも大いに満足していることがわかる。しかし『翻訳目録』の内容が内容だ。名前を出された人々にかえって支障が生じることになるかもしれない。陸国飛の謝意が裏目に出なければいいと思う。

『翻訳目録』について結論をいえばつぎの一言になる。出版社はどうしてこういう欠陥目録を刊行したのだろうか。

先行目録を不十分に複写しただけで新発見がなく誤記と不足だらけの「目録モドキ」なのだ。出版されるまで中国では誰もそのことに気づかなかった。無残といえばこれ以上のことはない。

見てはならないものを見たという思いがする。たとえば底なしの暗黒である。直視した私はたじろぎその場に立ち尽くす。

せつかく出てきた目録だが負の評価を下さざるをえない。なんとも残念で心が痛む。 罍

#### 【注】

- 1) 陸国飛『清末民初翻訳小説目録(1840-1919)』上海交通大学出版社2018.8
- 2) 文章は該書所収の「内容提要」を一部変更したもの。アマゾンの中国語版(アマゾン中国ではない)とかいくつかの出版社、書店ウェブサイトで見つかった。簡略化して記述しているばあいもある。日本東方書店の広告冊子『東方』第458号(2019.4)に日本語で圧縮した短文が掲載されている(34頁)。書店の冊子は書籍の販売促進が目的である。本稿のように負の評価をする書評は掲載されない。
- 3) 頁数が間違っているものがいくつもある。1例をあげる。「五小豪傑 27-602/349」と書いてS項目に配置する。書名の「十五小豪傑」を誤植した。しかもそこに示した頁数349は誤りで353頁が正しい。最終的な照合が行なわれなかったようだ。索引は分類と作品番号(例:27-602)だけのほうがよかった。
- 4) 典拠資料を明記する例外的な書籍はある。王泉根『百年中国児童文学編年史(1900-2016)』長沙・湖南少年儿童出版社2017.12。該書は刊行の日にちまで記述する。
- 5) 9-28「金銀島」(206頁)については原作者の表記が異なっていることに言及する。「每次再版的訳者名不同、有「史蒂文生」的、也有「司的反生」的」。わかっているのであれば版本ごとに記録して区別したほうがわかりやすかった。だいたいが説明せず無視するから目録として信用されない。
- 6) 陸国飛が27-610に原作者を新しく追加したこと

は言った。それ以外のほぼ独自に追加した部分で私が気づいたのは次のとおり。

5-1「哀塵」(151頁)に「Origine de Fantine、此篇為魯迅從日訳本転訳」と追加説明した。転訳した事実は知られている。それにもかかわらず樽目三に記述してある魯迅がもついた肝心の日訳については複写しない。

5-77「幾道山恩仇記」(162頁)の抱器室主人が陳少白だと追加した。陳少白簡介があるのはよい。なお樽目三には記載していないがすでに後版の注釈に陳少白の名前を出している。

10-6「点金術」(212頁)の著者を「(希臘) KING MADAS著」と追加して誤る。

11-44「吟辺燕語」(223頁)は「英国詩人」を記載せず、莎士比亞<sup>77</sup>と誤る。ただ「本書実為 CHARLES LAMB 与 MARY LAMB 所編著的“TALES FROM SHAKESPEARE”」と説明する。普通に知られているが追加だといえないこともない。

26-2「奉贈一圓」(282頁)は樽目三が「奉贈一圓<sup>77</sup>」と誤っているのを正した。それはよい。ただ自分で訂正したとわかるような注釈が必要ではなからうか。

24-6「八大伝」(285頁)に(日)滝沢馬琴著を追加した。中国人読者にとっては新発見だろう。

27-202「黒獄之光」(306頁)の訳者を「警鐘報社員」と改変した。樽目三では「社員訳述」(247頁)である。そう書き換えたのは[阿英149]が「警鐘報社訳印」と記述したのと合成したものだと思う。追加といえばそうかもしれない。ただし事実であるかどうかはわからない。

27-519「情天摸<sup>77</sup>蝸録」(344頁)は書名から間違う。柯為康<sup>77</sup>と新世界小<sup>77</sup>社を誤記して発行年は記載がないにもかかわらず「1906年(?)<sup>77</sup>或1907年(?)<sup>77</sup>」と追加する。これは追加といっても雑誌『新世界小説社報』に記載された刊年を移動させただけ。

## 林纾与苦海余生(刘锦江)往来考 ——从林纾佚文《〈佳儿佳妇〉序》谈起

王 玉

**摘要**：在1917年2月16日《中华编译社社刊》所登广告上，笔者发现了一篇林纾佚文《〈佳儿佳妇〉序》。据广告可知，《佳儿佳妇》是一部“家庭艳情小说”，著者苦海余生，林纾题写书名并作序，中华编译社出版。苦海余生即刘锦江，1916年在上海创立中华编译社，与林纾等旧派文人往来密切，后因国文函授骗局身败名裂，最终从文坛销声匿迹。中华编译社这个看起来声势浩大的旧派文人阵营，在1919年新文化运动高潮时期竟不战自溃，这对挂名该社主干的林纾来说，应该是一次不小的打击。

**关键词**：林琴南；刘锦江；《佳儿佳妇》；中华编译社；陈衍

### 一、林纾《〈佳儿佳妇〉序》

继《京华追忆录》<sup>\*1</sup>后，笔者近日在民国报刊上又发现了一篇林纾佚文。这篇文章叫《〈佳儿佳妇〉序》，登在1917年2月16日《中华编译社社刊》上。顾名思义，《中华编译社社刊》是位于上海的中华编译社社刊，初期是一份“非卖品”的企业内刊。该刊在第一版刊登了小说《佳儿佳妇》的出版预告，林纾序文是广告的一部分。略显遗憾的是，广告没有全文摘录林纾序文。据广告可知，《佳儿佳妇》是一部“家庭艳情小说”，著者是苦海余生，林纾题写书名并作序，由中华编译社出版。

虽然广告声称“书已付印，不日出版”，但笔者认为最终未能出版，因为目前不仅未见到原书，也查不到任何相关信息。在《中华编译社社刊》

第6号上，苦海余生曾夫子自道：

“我尝发愿作一部《佳儿佳妇》，其中有家庭之常识，有道德之常识，有工艺之常识，有科学之常识，以至于人类种种应有之常识。然使汇此种常识而成一部进德录，或道德论，人必掩耳疾走。一贯以少年夫妇情好靡笃，一举一言皆自檀口出之，而加香艳之文，则或能入人之目。然不过为绮语以增我一重孽障也。”<sup>\*2</sup>

听苦海余生口气，这部《佳儿佳妇》根本没有完稿，何谈出版。换言之，“书已付印”不过是忽悠读者的广告之语，现在是很难一睹林纾序文全貌了。现将广告上的林纾序文摘抄如下：

（上略）书云：新著《佳儿佳妇》一书，亦叙家庭情事。然则苦海余生之志，将为英国之迭更矣。小说家司各得写美人如天仙，仲马父子则斥美人如地胆，皆过也。独迭更先生性情既正，叙事复工，于是伦常日用之间，安插一绝世美人于其内，即之不佻，味之无穷。英之诗家亦恒言：“迭更之言情，为说部中别开生面。”此无他，以庸德摹绘美人，美人之身分愈高，则说部之流传亦愈远。苦海余生能如此用心，则追迹迭更，亦非难事。余老矣，救世有心，自问无术，外患内讧，余均无恤，所最可忧者，人心及女界耳，男子泯伦常，女子越范围，迁流所及，将比于禽兽。诗书之力于今日转成薄劣，不若以说部开灌而挽救之为愈。《佳儿佳妇》一书，大意正夫妇之伦，与琴挑目成者迥别。呜呼！果如是者，又何愧于迭更矣<sup>\*3</sup>。

林纾早年翻译过英国小说家狄更斯的《孝女耐儿传》（1907）、《滑稽外史》（1907）、《块肉余生述》（1908）、《贼史》（1908）和《冰雪因缘》（1909）。他曾说，“所恨无迭更司其人，能举社会中积弊著为小说，用告当事，或庶几也”<sup>\*4</sup>。在《〈佳儿佳妇〉序》中，林纾将苦海余生与狄更斯相提并论，这个评价是很高的。那么，这位让林纾作序并高度肯定的苦海余生，到底是何方神圣？

## 二、苦海余生其人

关于苦海余生的生平，目前尚未有研究文章公开发表。林纾门生朱羲胄说，苦海余生或谓即刘锦江也，字里行业待访<sup>\*5</sup>。经过多方查阅资料，笔者初步梳理清楚了苦海余生的“字里行业”。

苦海余生是刘锦江的别号。刘锦江，字哲庐，号斐村<sup>\*6</sup>，还有一些别称室名：沧遗<sup>\*7</sup>、通声<sup>\*8</sup>、

问字阁、无等等斋、烂柯山房、懵懂书生、红藕花馆、琴香阁<sup>\*9</sup>。对于他的籍贯，苦海余生自署政和<sup>\*10</sup>人。这个政和，按理说是福建政和县。但许多记载都说他是浙江人，如陈衍在《石遗室诗话》中提到他是“山阴人”<sup>\*11</sup>，徐碧波说他是“越人”，郑逸梅说他是“浙江绍兴人”。苦海余生卒年不详，但他在1910年代时还比较年轻。他是近代诗人、诗评家陈衍的门人，陈衍对他的评价是“美质好学，翩翩年少”。苦海余生名字中的“海”，应指上海。他家里较贫，侨寓上海，以“笔耕养母”。苦海余生卖文为生，可从《文学讲义》（第3期）上得到印证，该期杂志刊有“苦海余生鬻文简例”，文类包括记序、寿文、墓志铭等，价格从二十元到六十元不等。

在1919年之前的几年间，苦海余生在上海文坛非常活跃。一方面，他加入了南社<sup>\*12</sup>、国学商兑会<sup>\*13</sup>等文学社团。有著作称，苦海余生（刘哲庐）是进社（1916年成立）社友。笔者翻阅了进社社刊《进社》，苦海余生确实为该刊作序，并称

“进社之发起，于今十阅月矣。王子（指进社社长王汉彤）乃谓余：‘进社将印社刊以行世，子宜为吾述之’。余笑曰：‘保存国粹，余之夙志也……’”<sup>\*14</sup>

但在该刊附录的《进社同志题名录》中，并未列有苦海余生的名字，所以只能说他与进社关系密切，尚不能证明他是进社社员。另一方面，苦海余生积极为沪上报刊撰稿，并担任过若干刊物编辑、总编辑之职。他是《春申艺报》（1914年7月19日创刊）<sup>\*15</sup>、《小说新报》（1915年3月创刊，李定夷编辑）的重要作者。在《新世界报》（1916年11月5日创刊）上，他发表了《哲庐诗话》<sup>\*16</sup>。苦海余生（刘沧遗）还创办过《雅言报》；在1917年10月21日至1918年7月间，担任《劝业场日报》总编辑<sup>\*17</sup>。

1916年上半年，苦海余生在上海创办中华编译社，自任社长。该社位于上海新重庆路庆余里781号。据笔者统计，中华编译社先后出版了《文学常识》、《文学讲义》、《学生周刊》、《小说俱乐部》、《文学杂志》和《中华编译社社刊》等六种刊物。其中，《文学常识》创刊于1916年7月，苦海余生任总纂。该刊（上海图书馆藏第1集）曾于1931年（上海大中书局）、1947年（新光书局/上海国华书局）重印，载有刘锦江（哲庐）

的《论书牍》、《文体原始》、《战国时之文派》等文章。《文学讲义》也是创刊于1916年7月，林纾任主任，苦海余生任编辑，一年后停刊，共出12期。笔者在上海图书馆见到了1918年-1919年重印的前4期杂志。《中华编译社社刊》1917年2月创刊，上海图书馆共藏8期。《学生周刊》1917年4月创刊，由中华编译社附设的上海中国学生联合会发行，苦海余生任编辑，上海图书馆共藏11期。《小说俱乐部》1918年1月创刊，苦海余生任主任，上海图书馆藏第1期。《文学杂志》1919年正月创刊，苦海余生任编辑，上海图书馆藏第1期。

中华编译社附设函授部，以“通信教授普及国学”为宗旨。由于苦海余生网罗了以林纾为代表的一批名流兼任教员，中华编译社函授部社会影响力颇大。让人大跌眼镜的是，没过几年苦海余生利用中华编译社函授部一手导演了轰动一时的“文坛骗局”。对于这个骗局，林琴南弟子<sup>\*18</sup>徐碧波后来回忆：

民初一越人，名苦海余生，租上海重庆路一室，榜其楣曰“中华编译社”，夤缘得琴南翁一单本小说《巾幗阳秋》作幌子，广收函授子弟，得款匪少，旋遁去。今日某些刊授学校之少数文骗，皆师其故智也。<sup>\*19</sup>

“得款匪少”应该所言非虚，因为从1916年到1919年，刘锦江及中华编译社在《申报》上频繁以“林纾主任”、“林纾主干”名义发布招生广告<sup>\*20</sup>。截至1918年7月，中华编译社函授部就拥有本科生512名，预科生1567名<sup>\*21</sup>。历史学家顾颉刚也曾点名批评，

“近来函授国文依为生计者，依予所知有倪羲抱、苦海余生辈，类皆无业文士，略习经义策论之格式，即自谓博通国粹，鸣众师人”<sup>\*22</sup>。

文史掌故家郑逸梅这样记载：

《小说新报》由他（李定夷）主编了四年，不料他的友人某办中华编译社，大规模的函授招生，收了许多学费，却鸿飞冥冥，溜之大吉。定夷受了他的欺骗，负一主任名义，经过许多麻烦，终于辩白清楚。他深慨人心之险诈，世道之日非，愤而离去上海，北走幽燕<sup>\*23</sup>。

郑逸梅所谓的“友人某”即苦海余生。当初，苦海余生请李定夷担任中华编译社总务主任，让后者背了黑锅。据李定夷“北走幽燕”的时间可以推知，苦海余生是在1919年9月前携款潜逃。这个骗局

最后如何了结，现在已不得而知。1922年出版的《红杂志》对苦海余生有盖棺定论式的评价：

丧门神印鲍旭 苦海余生 赞曰：苦海无边，余生有几，何以慰情，盈门桃李。丧家远走，亦可哀已（苦海余生，创国文函授社于沪，初颇发达，后竟败坏不可收拾，论者惜之）<sup>\*24</sup>。

正所谓“成也萧何，败也萧何”。中华编译社让苦海余生声名鹊起，又让他身败名裂，最终在文坛销声匿迹。

苦海余生还参与过数种图书的编辑出版工作。如，1916年，中华编译社出版了2期《简易国文讲义》。该书由易实甫、林纾等讲述、苦海余生编辑。对于出版原因，中华编译社有过说明：“本社因《文学讲义》程度较深，特另编较为浅明之简易国文讲义一种，已在编撰中，阳历十一月一日当可出版。”<sup>\*25</sup>1918年，由（上海）交通图书馆出版的《戏剧大观》（第1集），著者是豁公刘达，编辑者即苦海余生。这位和苦海余生有交往的刘豁公，名达，安徽桐城人，擅写剧评，著有旧派小说数种。苦海余生（刘哲庐）在该书《发端》一文中透露，曾“几度谈戏于《时事》《中华》各报”<sup>\*26</sup>。1919年3月，胡寄尘著、刘哲庐校阅的《国文课外讲义》，由普通图书局印行。该书封底广告显示，刘哲庐（别署苦海余生）还著有《文章构造法》。1922年，署名苦海余生总纂的《婚姻指南》在（上海）国民图书馆再版（共4册）。不知这位苦海余生是否就是刘锦江，以后文坛、报界再也没有了他的消息。

### 三、林纾与苦海余生

从年龄上看，苦海余生是林纾晚辈，两人属于忘年交。那么，他们是如何认识的？在回答这个问题之前，先看看他的老师陈衍的一段记载：

门人刘哲庐（锦江）山阴人，美质好学，翩翩年少，侨寓上海，家贫笔耕养母，数年所入，有庐一区在成都路，亦已难矣。近复添购一阁，颜曰“问字”，将以为余行窝。余今年息影乡山，未知何日得至也。畏庐自都中，为绘一《著书庐》小立轴寄赠之。并题一绝句云：“万叠松涛百眼窗，二分秋气逼银缸。那知中有丹铅手，绝代销魂刘锦江。”首二句逼肖上海楼屋，哲庐方开设函授学校，故有“丹铅手”句。所异者畏庐与哲庐初未相见，何以知其文而美秀，而以前人赠王阮亭之句移赠之也<sup>\*27</sup>。



苦海余生自己也说过，他是陈衍弟子<sup>\*28</sup>。从“哲庐方开设函授学校”、“畏庐与哲庐初未相见”的记载来看，苦海余生能请动林纾出任中华编译社国文函授部主干兼教员，他的老师陈衍应该起了绝大作用。因为林纾和陈衍是至交，他们同为壬午（1882）年举人，一直过从甚密。不过，苦海余生在公开场合是这样说的，

“余创函授首邀琴南主任，引任公之于《庸言》、《大中华》为例，而琴南以为名不及任公，坚不肯承。余数四移书，乞其襄理，卒乃允诺。嗟乎！以今日之中国而犹有琴南之一人，不可谓非国粹之幸也。”<sup>\*29</sup>

该部“教员皆海内名流”，有林纾、陈石遗、易实甫、天虚我生、李涵秋、许指严、蒋箸超、胡寄尘、李定夷、苦海余生等数十人<sup>\*30</sup>。这批教员都是旧派文人，或属于国粹派，或属于鸳鸯蝴蝶派。

林纾挂名中华编译社函授部主干、教员后，积极撰写函授讲义。这些讲义，及林纾与苦海余生讨论讲义的书信，均刊发在中华编译社刊物上。此外，在该社刊物上，林纾还发表了《论古文之不宜废》等其他作品。具体篇目如下：《文学讲义》刊有林纾发表了《论文讲义》（第1-4期）、《文法讲义》（第1-4期）、《螺江太保七十寿文》（第2期）、《慎宣轩文集序》（第3期）、《与本社社长论讲义书》（第3期）和《再与本社社长论讲义书》（第3期）。在《文学常识》上，林纾发表了《论文》、《论画》两篇文章。《小说俱乐部》载有林纾《克家妇》、《射虎奇遇》两个短篇小说。《文学杂志》载有林纾手迹2幅（《林琴南先生手翰》）、《六朝文论略》、《读小雅》、《畏庐琐记》（共12则）、《异僧还贞记》。这篇《异僧还贞记》，放在“杂俎”栏目，文前标明“小说”，标题上方写着两行小字“清代轶闻”。乍看标题，笔者以为又是一篇佚文，待读完全文之后，发现即《畏庐漫录》中的《章云》。《异僧还贞记》这个标题应该是编者改的。《林琴南先生手翰》是林纾写给苦海余生的两封书信。目前的林纾研究资料，对这两封书信没有著录。在《学生周刊》上，载有林纾《与本社社长论讲义书》（第1期）、《气箴》（第1-3期）、《言箴》（第1期）、《再与本社社长论讲义书》（第2期）、《论古文之不宜废》（第2期）、《吴孝女》（第9期）、《诗两首》（“閨寂音尘久不欢……”、“海外迢迢致尺笺……”）（第10期）。《中华编译社

社刊》载有林纾《论文》（第1-6号）、《论画》（第2、4-7号）、《论书》（第3号）、《平台春柳图》（第3号，诗）、《螺江太保七十寿文》（第8号）、《为庄思缄作秋窗述旧图并题》（第8号，诗）。《中华编译社社刊》增刊《闰癸卯》（1917年9月，上海图书馆藏）载有林琴南《送刘渊源赴岭南序》、《与本社社长论讲义书》、《再与本社社长论讲义书》、《留呈高梦旦兼怀子益》（诗）、《论文》、《论画》、《畏庐琐记》和《葛秋娥》（伦理小说）。

林纾和苦海余生私人感情应该不错，1917年初他在致其信中说，

“正月中旬少间为写《苦海余生著书图》小横幅奉赠，并题小诗以识尔我之交谊”<sup>\*31</sup>。

这与上文提到的陈衍记载相吻合。林纾应邀创作了长篇小说《巾幗阳秋》（1917年8月），由苦海余生作序、中华编译社出版。林纾在序中称：

“海上有苦海余生，振奇人也。谓翁能为小说，索稿之书，至如急檄。翁太息不知所应。翁之弟子落落生者，多阅报章，通知时事，遂为翁述一近人之事，逐夜必来。翁张其半翳之目力，随笔书之。”<sup>\*32</sup>

苦海余生在序中，对林纾极尽推崇。他说：

“畏庐说部满天下……畏庐之才苟能折节取媚于世，则其智力足以夺总长、督办而有余……中国亦幸有一畏庐耳，不然，人且以为名士皆具泉獍之资……为小人易，为君子难，畏庐不务其易而求其难，则犹愚公之移山，虽终其身亦未能竟其志也。愚哉畏庐，谓之不合时宜，不亦宜乎。畏庐闻之，当亦莞尔曰：子真知我也。”<sup>\*33</sup>

值得注意的是，林纾致信锦江（苦海余生）说，

“兹寄新著小说一部，计二万余言，起自帝制发生，终于议员捣乱，名曰《巾幗阳秋》，就一美人口中，评量世局，中含伤时嫉俗之语，出以艳情，不署弟之本名，但名践卓翁，自有题者告白中，亦但称践卓翁可也”<sup>\*34</sup>。

从信中可见，林纾本意只署不太为人熟知的笔名“践卓翁”。但从出版结果来看，苦海余生不仅没有这么做，反而在《巾幗阳秋》出版广告中大书特书“林纾新著”“先生有言：此作远胜《茶花女》”<sup>\*35</sup>。这也反映出苦海余生只是一个想获得最大经济利益的商人。1918年9月，这部小说易名《官场新现形记》在（上海）普通图书局再版，由苦海余生校阅。《官场新现形记》一书封底广

告显示,由苦海余生纂、普通图书局发行的《红粉佳人》,也收有冷红生(林纾)等人作品。这个普通图书局位于上海新重庆路38号<sup>\*36</sup>,而这个地址也是苦海余生的“本寓”<sup>\*37</sup>。笔者推断,普通图书局是中华编译社附设出版部门,或者是其对外的另一块牌子。1918年12月,该局还出版了林琴南著《畏庐短篇小说》,校订者为懵懂书生(即苦海余生)。据《文学讲义》广告,刘哲庐(苦海余生)、李定夷还选刻过一部《今文选》,汇集中华编译社函授学生诗文,由林琴南、陈石遗订正<sup>\*38</sup>。

1919年初,苦海余生在上海创办了“以维持国学为主”的中国文学研究会,请陈衍担任主任。1919年4月创刊、陈衍任主任、苦海余生任编辑的《文艺丛报》,可以视为该会会刊。在该刊第1期上,林纾发表了《古文与白话之相消长》。据说第2期稿也已发全,计添刊林琴南《虎窟捋须记》<sup>\*39</sup>等五种新稿,但目前未见到该期杂志,不知最终是否出版。这篇《虎窟捋须记》很有可能是林纾的佚文。

苦海余生对林纾小说作有一些文艺批评。如,“小说在近理,不在炫才。曩于报端见有践卓翁小说,能琐屑叙人事不流于鄙。闭目思之,似确有其事者,以为非能手不办。及识琴南,始审为渠作也。琴南得力于《史记》者多,故其叙事也,简而明,渊然而有光。若《聊斋》之文,其擅场处不过浓郁奇艳,而按之情理诘得谓平耶?”<sup>\*40</sup>“至于工深力到能用文话叙俗事而不厌其俗,此则上上乘,然非初学之所能办矣(林译小说有此种工夫)。”<sup>\*41</sup>常为学者所引用的是:“近人小说,文言推林琴南,白话推李伯元……琴南说部,译者多为,然非尽人所可读也。他人译说部,常为原本所泥,而琴南不拘拘于西文,去其赘而补其不足,是译书之第一要诀也……琴南之小说,不止凌轹唐宋,俯视元明,抑且上追汉魏。”<sup>\*42</sup>据说这部分袭用了披发生(罗普)的观点<sup>\*43</sup>。

综上所述,在1916年-1919年的短短四年间,林纾与苦海余生两人往来密切。对于林纾而言,这段时间意义重大。因为当时正处于新文化运动蓬勃兴起的年代,国粹派、鸳鸯派等旧派文人亟须采取行动以免被边缘化。正因为此,苦海余生打着普及国学、保存国粹的旗帜创办中华编译社,才获得了以林纾为代表的旧派文人的鼎力支持。但结局有点荒诞,陈衍笔下那个“年少颖异,下笔

不能自休,而好学笃志,于时俗嗜好,视之如粪土”<sup>\*44</sup>的苦海余生,竟然携款潜逃,这无疑让林纾等人成了苦海余生招摇撞骗的幌子,成了函授国文这个骗局的买单者之一。中华编译社这个看起来风生水起的旧派文人阵营,在1919年新文化运动高潮时期竟不战自溃,这对林纾来说应该是一次不小的打击。正应了那一句老话“其兴也勃也,其亡也忽也”。四

#### 附录:苦海余生作品目录(仅录笔者所见第一手资料)

1. (刘锦江哲庐),《论书牍》、《文体原始》、《战国时之文派》,《文学常识》1916年第1集。
2. (红藕花馆主哲庐)《西厢诗库》,《小说新报》1916年2卷1-9期;
3. (哲庐)《红藕花馆词话》,《小说新报》1916年2卷1-5期;
4. (哲庐)《朱三太子事考》(小说),《小说新报》1916年2卷5期;
5. (苦海余生)《清史拾遗》,《小说新报》1916年2卷5期;
6. (哲庐)《痛心疾首》(小说),《小说新报》1916年2卷6期;
7. (哲庐)《选辑明版秘本〈碧纱笼〉》,《小说新报》1916年2卷7-12期;
8. (刘哲庐)《朱孝妇》(小说),《小说新报》1916年2卷7期;
9. (烂柯)《烂柯山房琐记》,《小说新报》1917年3卷1-7期;
10. (哲庐)《梅园煮雪谈》,《小说新报》1917年3卷11期;
11. (苦海余生)《发刊辞》,《学生周刊》1917年第1期;
12. (哲庐)《箴学生》,《学生周刊》1917年第5期;
13. (苦海余生)《苦学生》(小说),《学生周刊》1917年第10期;
14. (刘哲庐)《文学浅识》,《学生周刊》1917年第10期;
15. (哲庐)《论学生宜自尊》,《学生周刊》1917年第10期;
16. (哲庐)《箴女学生》,《学生周刊》1917年第11期;
17. (苦海余生)《论小说》,《中华编译社社刊》

- 1917年第1、4、5、6号;
18. (刘哲庐)《论词》，《中华编译社社刊》1917年第4号;
  19. (苦海余生)《爱情之代价》(写情小说)，《精华周报附张》1917年第11卷第18期;
  20. (刘锦江)《林琴南与梁任公》，《寸心》1917年第3期;
  21. (刘哲庐)《序二》，《进社》1917年第1期;
  22. (刘哲庐通声)《写信法讲义》，《文学讲义》1918年第2期;
  23. (苦海余生)《作小说法》，《文学讲义》1918年第3-4期(第4期署名刘锦江哲庐);
  24. (刘哲庐)《奁艳丛缀》，《小说俱乐部》1918年第1期;
  25. (哲庐)《奁艳丛缀》，《小说新报》1918年4卷3期;
  26. (苦海余生)《发刊辞》，《文学杂志》1919年第1期;
  27. (苦海余生)《哲庐谈屑》，《文学杂志》1919年第1期;
  28. (苦海余生)《发刊词》，《文艺丛报》1919年第1期;
  29. (苦海余生)《艺苑丛谈》，《文学讲义》1919年第4期;
  30. (政和刘哲庐)《国文典讲义》，《文学讲义》1919年第4期;
  31. (苦海余生)《无等等斋闲谈》，《小说新报》1919年第5卷第1期;
  32. (懵懂书生)《腥风血雨》(小说)，《小说新报》1919年5卷3期;
  33. (懵懂书生)《行篋情书》(小说)，《小说新报》1919年5卷5期;
  34. (懵懂书生)《懵懂书屋随笔》(6则)，《小说新报》1919年5卷5期;
  35. (懵懂书生)《呜呼误矣》(小说)，《小说新报》1919年5卷5期;
  36. (懵懂书生)《海外孤忠》，《小说新报》1919年5卷6期;
  37. (懵懂书生)《遗嘱》(小说)，《小说新报》1919年5卷7期。
- (完)
- 【注】**
- 1 详见王玉：《〈广肇周报〉与林纾佚著〈京华追忆录〉》，[日]《晚清小说から》2019年第133号。
  - 2 苦海余生：《论小说》，《中华编译社社刊》第6号，1917年9月1日。
  - 3 《〈佳儿佳妇〉广告》，《中华编译社社刊》第1号，1917年2月16日。
  - 4 林纾：《贼史》，商务印书馆，1914年，序第1页。
  - 5 朱羲青：《贞文先生学行记》，商务印书馆，1949年，第18页。
  - 6 郑逸梅：《郑逸梅选集》(第1卷)，黑龙江人民出版社，1991年，第641页。
  - 7 《上海地方史资料》(五)，上海社会科学院出版社，1986年，第75页。
  - 8 《目录》，《文学讲义》1918年第2期。
  - 9 杨廷福等：《清人室名别称字号索引》(增补本 下)，上海古籍出版社，2001年，第854页。
  - 10 《写信法》，《文学讲义》1918年第1期。
  - 11 陈衍：《石遗室诗话》(2)，辽宁教育出版社，1998年，第359页。
  - 12 汪梦川：《南社词人研究》，上海古籍出版社，2015年，第395页。
  - 13 《中国近代文学大系》(第12集·第30卷·史料索引集二)，上海书店，1996年，第37-38页。
  - 14 苦海余生刘哲庐：《序二》，《进社》1917年第1期。
  - 15 王荣华：《上海大辞典(中册)》，上海辞书出版社，2007年，第1215页。
  - 16 汪梦川：《南社词人研究》，上海古籍出版社，2015年，第397页。
  - 17 《上海戏曲史料会萃》(第五集)，上海艺术研究所，1987年，第174页。
  - 18 《中国美术家人名辞典》(补遗一编)，三秦出版社，2007年，第419页。
  - 19 顾国华：《文坛杂忆》(全编一)，上海书店，2015年，第37页。
  - 20 参考《申报》1916年9月20日第14版、1919年5月5日头版广告。
  - 21 《同学录发端》，《文学讲义》1918年第1期。
  - 22 顾颉刚：《缓斋藏书题记(三)》，《历史文献》(第3辑)，上海科学技术文献出版社，2000年，第24页。
  - 23 郑逸梅：《芸编指痕》，北方文艺出版社，2016年，第247-248页。
  - 24 《纸片战争：〈红杂志〉〈红玫瑰〉萃编》，上海古籍出版社，1999年，第7页。
  - 25 《通告》，《文学讲义》1918年第二期。

- 26 豁公刘达：《戏剧大观》（第一集），交通图书馆，1918年，发端第2页。
- 27 陈衍：《石遗室诗话》（2），辽宁教育出版社，1998年，第359-360页。
- 28 《石遗先生鬻文、字直例》，《文学讲义》1918年第3期。
- 29 刘锦江：《林琴南与梁任公》，《寸心》1917年第3期
- 30 《中华编译社函授部文科简章》，《文艺丛报》1919年第1期。
- 31 《林琴南先生之手翰（二）》，《文学杂志》1919年第1期。
- 32 林纾（冷红生）：《巾幘阳秋》，中华小说社、中华编译社，1917年，小引第1页。
- 33 林纾（冷红生）：《巾幘阳秋》，中华小说社、中华编译社，1917年，序第1-2页。
- 34 《林琴南先生之手翰（二）》，《文学杂志》1919年第1期。
- 35 《〈巾幘阳秋〉广告》，《中华编译社社刊》第7号，1917年9月16日。
- 36 《中华文学研究会简章》，《文艺丛报》1919年第1期。
- 37 《苦海余生鬻文简例》，《文学讲义》1918年第3期。
- 38 《〈今文选〉广告》，《文学讲义》1918年第3期。
- 39 《本报启事一》，《文艺丛报》1919年第1期。
- 40 苦海余生：《论小说》，《中华编译社社刊》第6号，1917年9月1日。
- 41 苦海余生：《作小说法》，《文学讲义》1918年第3期。
- 42 苦海余生，《论小说》，《闰癸卯》1917年9月，第9-10页。朱羲胄《贞文先生学行记》（商务印书馆，1949年，第18页）亦有部分转载。
- 43 林薇：《百年沉浮——林纾研究综述》，天津教育出版社，1990年，第9页。
- 44 陈衍：《中国文学研究会简章·缘起》，《文艺丛刊》1919年第1期。

（作者系《上海行政学院学报》编辑，  
邮箱：31962066@qq.com）

## 《新小说》第三号的出版时间及其他

贾立元

摘要：本文对梁启超的《新中国未来记》（1902）第四回中出现的一条新闻进行了核证，由此指出《新小说》第三号存在出版延迟的情况，并结合另一部小说《月球殖民地小说》的连载情况，指出期刊的出版时间是晚清科幻小说研究中的重要信息，特别是对那些近未来的故事而言，它可能会揭示出作者叙述未来时的困难。

关键词：《新小说》 梁启超 《新中国未来记》 《月球殖民地小说》 科幻小说

1902年，《新小说》在横滨创刊。目前，学界普遍认为：《新小说》前三号保持了月刊形式，从第四号开始，出现了延期出版的情况。<sup>\*1</sup> 不过，笔者在研究梁启超的《新中国未来记》（以下简称《未来记》）时发现，《新小说》第三号也存在延期出版的问题。

在该号上发表的《未来记》第四回里，有这样一段描写：

两人一看，见是美国桑佛朗士戈市的《益三文拿》，陈君翻看第三页，指着一条题目，两人看是《满洲归客谈》。看他写到：

“美国议员波占布，因想查考俄罗斯待中国人的情形，改了中国服装，到满洲地方游历。在

那里耽搁了半个多月，昨日回来。据他说的，哥萨克兵到处糟蹋中国人，实在目不忍睹。……在那里不过二十天，已经遇着了么多横暴无理的事，正不知住在那里的中国人，怎样过得这个日子哩！”【著者案：此段据明治卅六年一月十九日东京《日本》新闻所译原本，并无一字增减。】\*2

作为“小说界革命”的发起人，梁启超自称：创作《未来记》之念已在他心中酝酿五年，却始终不能落笔，最后专门为此创办了《新小说》，希望通过连载的方式对自己施压，并借小说的形式，“发表区区政见”，以启迪国民，结果却是“编中往往多载法律、章程、演说、论文等，连篇累牍，毫无趣味”，连自己也觉得“似说部非说部，似稗史非稗史，似论著非论著，不知成何种文体”。\*3 而上面的这一段内容，也就常被研究者们作为梁启超“以时事入小说”的例证。\*4

问题是，第三号自标的出版时间为“光绪二十八年十二月十五日”，即1903年1月13日，其中怎么会出现一条“明治三十六年一月十九日”的新闻呢？

需要说明的是，《未来记》是一部指向“未来”的小说。故事开篇就写到六十年后，中国已繁荣昌盛，各国齐聚南京，召开和平会议，孔子后人孔觉民开坛演史，追溯“往事”。对此，《新民丛报》如此解释：“虚构今日以后之事，演出如锦如荼之中国。但发端处最难，盖从今日讲起，景况易涉颓丧，不足以提挈全书也。”\*5 作者的心愿可谓美好，不过在这一幕盛世远景之后，故事时间仍需回到“颓丧”之今日。小说第三回，两位主人公于“明年癸卯，暮春初夏的时节”来到山海关。\*6 第四回，二人在“三月廿八日礼拜六”到达旅顺。\*7 也就是说，在据称出版于1903年1月13日的小说中，故事时间已经进展到了3月28日以后。既然如此，其中的“明治卅六年一月十九日”会不会也是一种虚拟时间呢？这并非毫无可能。尽管，“著者案”强调：“以上所记各近事，皆从日本各报纸中搜来，无一字杜撰，读者鉴之”。\*8 不过，这终究是一部小说，对于

后世的研究者而言，如果不能证明当时的日本报纸上确实有名为《满洲归客谈》的新闻，就无法完全排除梁启超在虚构作品中凭空杜撰出一则“未来新闻事件”的可能性。

然而，或许是因为作者给出了两份报纸的准确名目及其中一份的具体日期，似乎没有必要再去核实这一条“新闻”的真伪。比如，山田敬三就说：《未来记》中的《满洲归客谈》，“据著者的注记，这是把明治36年1月19日东京《日本》报从旧金山的《益三文拿》报译载的文章‘并无一字增减’地引用的报道。”\*9 这里既然说“据著者的注记”，说明山田也没有去核对过原文。

那么，《满洲归客谈》是否是真实的新闻呢？答案是肯定的。它确实就刊登在明治卅六年一月十九日的《日本》第383号之附录《日本周报》的“杂录”栏目上，内容包括一位“モンテグ・ボーシャムプ氏”和另一位“米国幕府の状师グール博士”的满洲见闻。梁启超的《未来记》比较忠实地引用了“モンテグ・ボーシャムプ氏”（即“波占布”）的故事，只不过将另一位グール博士“米国幕府の状师”的身份误植在“波占布”身上了。这位日文新闻中身份不详的“波占布”，其实就是中国内地会传教士“章必成”（Montague Beauchamp），即所谓“剑桥七杰”（The Cambridge Seven）中的一位。\*10 当时，美国媒体非常关注俄国在满洲的动向。\*11 1903年1月29日，旧金山的另一家报纸The San Francisco Call也报道了英国教士Montague Beauchamp和费城的W. E. Gell博士的见闻。\*12 由此可知，《未来记》第四回的完成时间一定在1903年1月19日之后，《新小说》第三号的出刊时间，自然要比这更晚了。

另一方面，1903年2月14日的上海《游戏报》上出现了“《新小说报》第三号已到”的广告，\*13 因此，该号的出版时间也不会晚于此，即当在1月19日至2月14日之间。再考虑到杂志的排版、印刷、运输到上海都需要一定时间，实际的出刊时间范围会窄得多。事实上，《未来记》第四回中，在《满洲归客谈》出现的前一页，还有一条

零二年”的大同梦幻。这些故事，将当时的读者带入到自己不能抵达的时空，以种种神奇景观鼓荡人心，其背后的焦虑与冲动亦颇可玩味。不过，作为此类本土幻想的滥觞，《未来记》描绘的似乎只是当时的社会现实而已。<sup>\*15</sup> 夏晓虹就认为：除了开篇，《未来记》的中心事件不曾超前进入过“未来世界”：“最晚的情节发生在1903年，与小说的创作时间同步。”<sup>\*16</sup> 但事情并非如此。

如前所述，《未来记》第四回的完成时间最迟不会晚于1903年2月14日，而故事时间已进展到3月28日以后。这意味着，故事的中心事件，在第三回、第四回中其实一直处于“未来世界”。只是到了实际刊发于1904年1月以后的第五回，故事时间才陷入停滞并被现实时间所超越。<sup>\*17</sup>

当然，两位主人公，在短暂地“闯入”了切近的“未来”后，只是进行了一场冗长的论辩，接着又评论了不少时事近闻。作者似乎满足于“发表区区政见”，而并没有安排什么真正具有“未来感”的情节。不过，也不能因此就说梁启超超写作前四回时，心中全无“未来感”。考虑到梁启超1899年在前往檀香山的旅途日记中说“吾今所游者，乃行用西历之地，吾若每日必对翻中历乃录日记，虽此些少之脑筋，吾亦爱惜之也”，<sup>\*18</sup> 就更有理由相信：当梁启超落笔写下“三月廿八日礼拜六”这个还没有到来的日子时，很可能专门去翻阅了日历，毕竟，就算是今天的我们，想要不借助工具就马上说出几个月后的某一天是礼拜几，也并非易事。也就是说，梁启超应该知道自己正在画出未来的第一抹线条，哪怕只是超前于现实几个月的近未来，也总归是在朝着“六十年后”那个“如锦如荼之中国”缓慢前进的。当然，由于种种原因，故事的实际形态最终还是没能摆脱“现实”的引力，梁氏生平唯一的小说创作最终不了了之。

可见，对于那些叙述未来的小说而言，故事的发表时间，很可能会提示出一些不易察觉却微妙而重要的信息，并折射出一代知识人在中与西、旧与新、过去与未来之间的交汇中勉力前行的渴望与生涩。这也能通过另一个例子说明。



明治卅六年一月十九日的《日本》第383号所载《满洲归客谈》

关于俄国舰队的新闻，并有“著者案”：“此乃最近事实，据本月十四日路透电报所报”。既然第四回的完稿时间在1月19日至2月14日之间，那么，这里的“本月十四日”基本上可以断定是1月14日，即“本月”当为1月。因此，有理由将第四回的完稿时间进一步缩小到1月19日至1月31日之间。<sup>\*14</sup>

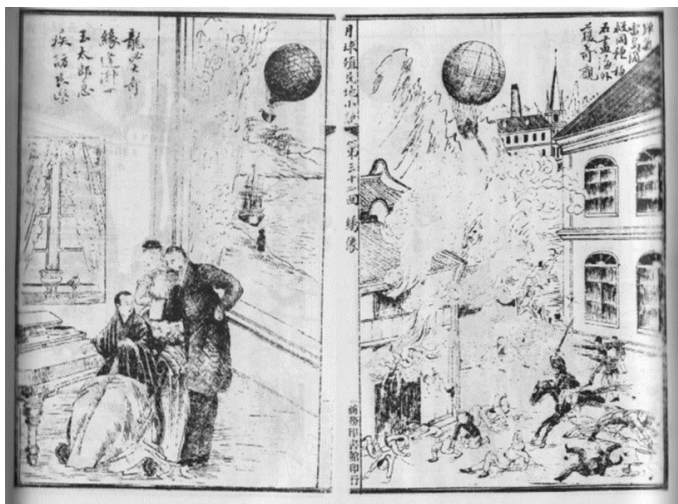
二

众所周知，晚清的一些报刊，在延迟出版时，为了造成连续出版的印象而标定虚假的出刊时间。追究期刊的真实出版时间因此成为近代小说研究中的最基本问题，这在晚清科幻小说的研究中又显得格外重要，因为“未来”正是科幻小说的最重要的主题和内容之一。

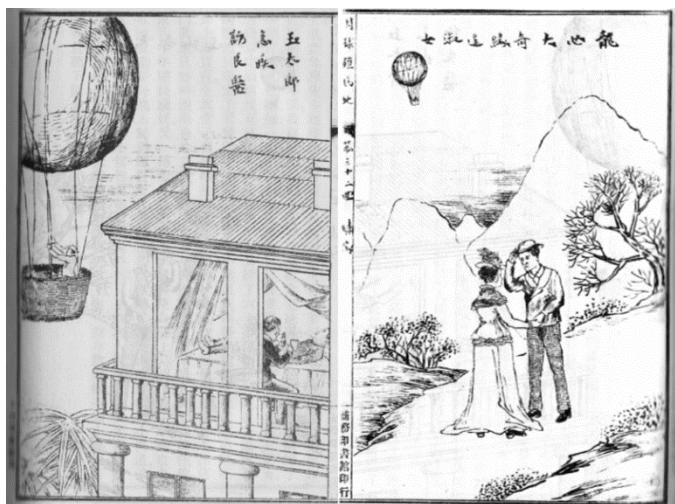
中国古代小说并无“未来记”形式的作品。唯有到了近代，东西冲撞，进化论的时间观和历史观才让“未来”得以浮现。在国颓民困中，晚清小说家们受西方和日本科幻类作品的启发，写下不少未来狂想。譬如，1908年出版的《新纪元》有声有色地描绘了一场九十多年后（1999）的世界大战，宣统元（1909）年发表的《电世界》讲述了从“宣统一百零一年”到“宣统三百

1904年,《绣像小说》从第21期开始连载《月球殖民地小说》,讲述妻离子散后流亡南洋的志士龙孟华,在日本科学家的帮助下乘坐先进气球寻妻觅子同时谋划维新大业的故事。经过漫长的寻找,龙终于与家人团聚,了结了“才子佳人”聚散离合的线索,而作为另一条线索的维新大业,却依然没有什么突破。这时,作为新的情节驱动力的月球人便神秘登场了,他们将龙一家接走,并暗示读者:接下来,不只是大清子民,而且全人类都将会陷入更大的麻烦中——地球将沦为月球的殖民地。高科技的气球与月球文明的出现,让《月》比《未来记》更具科幻色彩并被《中国大百科全书》(1986年版)追认为“中国作者创作的最早的科幻小说”。\*19 不过,和《未来记》一样,这个长达35回的故事也有始无终。原因之一可能在于,这是中国文学史上首次讲述星际战争的尝试,对于真实身份不详的“荒江钓叟”而言,这大概是个过于艰巨以致无法完成的任务。《月》的发表情况,或许可以佐证这一点。

因后期出刊常有延期,《绣像小说》仅前12期标明了出版时间。通过查阅《中国近代小说编年史》,笔者注意到:《月》最初与读者见面,大约是在光绪三十(1904)年十月的第21期,前31回一直以每期1至2回的进度保持比较稳定的连载(25、41期无),直至光绪三十一(1905)年八月的第42期。该期虽然仅刊载了第31回“弹气雷岛滨救同种,移石画海外获奇观”的文字内容,但仍与之前一样,配了两回(31、32回)的插图,每回各一张,这应该是制版的需要。也就是说,以主人公寻妻为主要内容的前31回,在不到一年的时间里发布于世。之后,却足足中断了一年之久,月球人才在姗姗来迟的第32回(光绪三十二年七月第59期)中正式登场。一年前预告过的回目“龙必大奇缘逢淑女,玉太郎急疾访良医”也被拆分成两句话,各自重新配图。此后,小说仅以每期1回的速度,勉强写了3回便彻底夭折。诸如此类的迹象,是否都在相当程度上,表明了作者试图引入月球文明时的艰苦和难以为继呢?



《绣像小说》第42期为《月》第31、32回所配的插图



《绣像小说》第59期为《月》第32回重配的插图

和《未来记》一样,若不细察,《月》中除“气球”和“月球人”外,似乎也并无“未来感”很强的事件,容易给人以在描摹当下黑暗现实之感。然而,在光绪三十(1904)年十月登场,时间为“西历十二月十四号,合中历是十一月十五日”,而稍后日本科学家登场时已经过去“整整八年了”。根据书中的各种线索,可以推定,故事时间起于1902年,并很快进入到1910年。\*20 读者或许未必意识到,作者却一定心中有数:先进的气球登场后的种种神奇事件,都发生在“未来”。

但也正因此,“荒江钓叟”给自己制造了一个麻

烦。光绪三十二（1906）年七月十三日，清廷宣布“预备立宪”。紧接着，《月》的最后三回（第60-62期）就于八月与读者见面了，却从此再无后话。我们不禁会想：这个声称要描写志士维新救国、已经连载了35回、故事时间早已越过1910年的小说，接下来要如何解释自己此前从未写到过立宪和议会的内容呢？对作者而言，这也是一件很头疼的事吧。 罍

（感谢东京都立大学的上原香女士和华东师范大学的陈大康先生、北京的作家梁清散先生为本文的资料搜集与辨析提供的重要帮助与意见）

【注】

- 1) 樽本照雄：《〈新小说〉的出版日期和印刷地点》，《清末小说研究集稿》，陈薇监译，齐鲁书社2006年版，第209-217页。夏晓虹：《谁是〈新中国未来记〉第五回的作者》，《阅读梁启超》，生活·读书·新知三联书店2006年版，第296-303页。陈大康：《广告：近代小说研究的重要支撑》，《华东师范大学学报（哲学社会科学版）》2015年第5期。
- 2) 梁启超：《新中国未来记》，《新小说》第三号。
- 3) 梁启超：《新中国未来记》，《新小说》第一号。
- 4) 欧阳健：《晚清小说史》，浙江古籍出版社1997年版，第29页。
- 5) 《中国唯一之文学报〈新小说〉第一号要目预告》，《新民丛报》光绪二十八（1902）年九月一日第十七号。
- 6) 梁启超：《新中国未来记》，《新小说》第二号。
- 7) 梁启超：《新中国未来记》，《新小说》第三号。
- 8) 同上。
- 9) 山田敬三：《围绕〈新中国未来记〉所见梁启超革命与变革的思想》，狭间直树主编：《梁启超·明治日本·西方》，社会科学文献出版社2012年版，第312页。
- 10) 关于“剑桥七杰”，参加马丁：《芝罘学校：1881-1951年之间历史和回忆》，陈海涛、刘惠琴译注，齐鲁书社2013年版，第40页。
- 11) Ashbrook Lincoln. The San Francisco Bay-Area Press Views Russian Aggression in the Far East, 1903-1905: Including Comment by the Sacramento Union. California Historical Society Quarterly, Vol. 30, No. 3 (Sep., 1951), University of California Press in association with the California Historical Society, pp.193-206.
- 12) Cossack Rule in Manchuria is Oppressive. The San Francisco Call, 29 Jan.1903, p.6. 另外，这个《益三文拿》报，是否是旧金山的Examiner报，有待进一步查证。
- 13) 陈大康：《中国近代小说编年史》，人民文学出版社2014年版，第570页。
- 14) 梁启超：《新中国未来记》，《新小说》第三号。
- 15) 孙楷第认为，此作“虽系寓言，然白云：‘以发表政见’，则亦为时事而发。且文中所演多指当时事，与演当代事之讲史书亦有相近之处，今故入讲史目”。孙楷第：《中国通俗小说书目（外二种）》，中华书局2012年版，第63页。
- 16) 夏晓虹：《觉世与传世——梁启超的文学道路》，中华书局2006年版，第68页。
- 17) 《新中国未来记》第五回载于《新小说》第七号，未署名，该号出刊时间标为“光绪二十九年七月十五日”（1903年9月）。有研究者怀疑此回非梁启超所做，但据夏晓虹考证，第七号实际出刊时间当在1904年1月17日以后，怀疑梁启超并非第五回作者的几条理由皆不充分。本文采纳夏的观点，认同第五回的作者是梁启超。夏晓虹：《谁是〈新中国未来记〉第五回的作者》，《阅读梁启超》，生活·读书·新知三联书店2006年版，第296-303页。
- 18) 梁启超：《夏威夷游记》，汤志均、汤仁泽编：《梁启超全集》第十七集，中国人民大学出版社2018年版，第260页。这种换算的麻烦给《未来记》的叙事制造了许多时间上的错乱，最明显的一处便是开篇就把六十年后（1962）写成了“西历两千零六十二年”。
- 19) 中国大百科全书总编辑委员会《中国文学》编辑委员会编：《中国大百科全书·中国文学I》，中国大百科全书出版社1986年版，第353页。
- 20) 荒江钓叟：《月球殖民地小说》，谈蓓芳校点。见《中国近代小说大系》，江西人民出版社1989年版，第224、244、246、250页。

清华大学人文学院 jialy@tsinghua.edu.cn



## 意見拡散には相応の反応がある

中国の文学研究について外国人が事実にもとづいて具体的に批評すると本人および中国人の一部は立腹する。不思議ではない。普通のことだ。発言者が日本人であればその怒りが倍加するらしいのを見てきた。当事者の中国人研究者たちそれぞれから弁解あるいは憤怒の手紙をもらったこともある。私の経験からいっていつもそうだった。最近の例を紹介する。当事者ではないはずだが示した反応が似ている。

樽本照雄著、李艶麗訳『林紓案事件簿』（北京・商務印書館2018.7）に関して中国のウェブサイト「豆瓣読書」に短評がいくつか掲載されている。個人の受け止め方は自由だ。しかしそれを文章にして外部に拡散すれば反応が出てきて当然だろう。承知のうえだと理解する。

そのうちのひとり筆名「海生花（南京）」が書いて日本人が林紓の冤罪を晴らしたという（2019.3.1付）。ただし『事件簿』の書き方が気に障る。「お前たちは全員だめだ、自分だけが新世界を発見した〔你們都不行、只有我发现了新大陸〕」と読んだ。そういう風を感じられ

るという。どうしてもそこが気に食わない。「海生花（南京）」が表現したその部分が興味深い。「しかし間違いなく不愉快に感じる〔然而确实感到不舒服〕」。

「海生花（南京）」が誰だか知らない（リンクをたどると曹丹紅・南京大学が出てきた。当人と関係があるかどうかは未確認）。まるで自分が非難されたかのように不愉快をおぼえるくらいだから研究者らしい。そこから「海生花（南京）」が反林紓である文学革命派側に立っていることが透けて見える。ここは中国学界の伝統を守っている。

それはそうだと私はひとり納得する。中国で林紓批判がはじまったのは1918年という五四直前からだ。「文化大革命」を経過して1980年ころまで林紓批判が基本である。2007年に林紓冤罪説が日本で提起された。日本語で書かれたから知っている中国人研究者は多くない。

それにしてもほとんど90年から100年間にわたって林紓批判が継続実行されていた事実は重い。しかも冤罪が明らかになった今も林紓研究には言及してはならないらしい立入禁止区域がある。いまだに林紓の名誉は完全に回復されてはいないのだ。林紓批判者たち全員は自分が林紓の人権を侵害しているという認識を持たない。

「海生花（南京）」は物心ついてからそういう環境の只中にあった。それ以外の見方が存在するなど想像もしなかっただろう。証明不必要の林紓批判が学界の常識だ。意識しなくても反



海生花 (南京)

2019-03-01 ★★★★★

破案了。洋洋洒洒几百页，樽本老师的宗旨只一条：对于林紓误译漏译错译连删带改等等的批评，很多时候都是没有根据的，然而从来没有一个中国人想到去查一查底本，还要靠一个日本人来为林洗刷冤情，可悲可叹。//林译莎士比亚冤案这一篇可以说很有代表性了。//可我还是初看时的感觉：承认樽本老师的发现非常有价值，而且给人很多启发尤其警醒，然而那种“你们都不行，只有我发现了新大陆”的调调，怎么说，我不是故意煽动，然而确实感到不舒服。他斥责批林的左翼人士“群殴”（原话）可怜的林紓，然而他自己对左翼人士的观点，又何尝不是采用了同样粗暴的态度与方法？

「豆瓣読書」2019.3.1

林紓が当然の世界である。誰も疑問に思わなかった。そこに身を置き学習を重ねて成長すれば周囲の人々と同じで不安を感じることなく骨がらみで安定した反林紓論者になる。

ところが中国では2018年になって『林紓冤案事件簿』が出現した。一般の研究者にしてみれば突然外部から林紓は冤罪だと提起されたことになる。それも日本人がそう指摘しているから「海生花(南京)」は頭では理解できても生理的に受け入れることができない。自分の感情を害されて不快になった。身体的反応を示す「不舒服」という言葉に反日感情をからめてむき出しにした。もしもフランス人研究者が同じことを書いたら「不舒服」と感じるだろうか。いや中国人が気づかなかった事実を指摘してくれたと絶賛すると思う(個人の感想です)。ところが日本人だどうしても偏向してしまう。それが今の中国人研究者の一部分だ。

ここは注意点である。研究に国境は存在しない。論文内容が重要であって執筆者が誰であるかは無関係だ。だが日本人が書いたというだけで嫌悪感を抱くならば「海生花(南京)」の(研究者としての)将来は期待できない。林紓冤罪を提出したのはなぜ自分ではなかったのか。他人にできて自分ができなかった理由はなにか。それを反省したうえで原因を追究してこそ自己の発展につながる。分野は違っても研究原理は同じである。そこが重要だ。気分が悪いと被害者を気取っているばあいではない。

とはいえ筆名を使う身元不明人だ。本人にしてみれば外部からの声はよけいな世話だろう。親切に助言するだけ無駄だと思う。結局のところ個人の感想におちつく。第三者が口をはさむことではない。

㊦

(樽本照雄)

(2019.3.30付清末小説研究会ウェブサイトに掲載したものです)

## 清末小説から

- 馬 曉冬○『曾樸：文化轉型期的翻譯家』北京大学出版社2014.10 中法文學關係研究叢書
- 沈潜、肖逸然著○『曾樸』南京・鳳凰出版傳媒股份有限公司、江蘇人民出版社2016.1 江蘇歷代名人伝記叢書
- 夏 曉虹○從“誨盜之書”到“祖国第一政法小説”：晚清的“新評《水滸傳》”『嶺南學報』第8輯 現代与古典文學的相互穿越——故事新編与理論重建 2017 電字版
- 陳 大康○近代報刊小説轉載編年史『嶺南學報』第8輯 現代与古典文學的相互穿越——故事新編与理論重建 2017 電字版
- 韓 希明○『快意動千秋——話説曾樸』南京・江蘇人民出版社2017.11 文學江蘇讀本
- 王 泉根○『百年中国兒童文學編年史(1900-2016)』長沙・湖南少年兒童出版社2017.12
- 馬 雲○『中国近現代人文幻想小説研究』北京・中国社会科学出版社2018.8
- 朱 義胄○『林畏廬先生學行譜記四種』(外一種：文徵)成都・四川大學出版社2018.11
- 鄒 國義○第一部翻譯小説《昕夕閑談》訳事考論『中華文史論叢』2008年第4輯 未見
- 鄒國義編注○『昕夕閑談：考注与資料彙輯』上海古籍出版社2018.11
- 常熟市文化广电新聞出版局、《曾樸全集》編輯委員會編、苗懷明主編○『曾樸全集』全10冊揚州・広陵書社2018.11
- 黄 静○『晚清民国期中国文學的勸場書写研究』蕪湖・安徽師範大學出版社2018.11
- 呉淳邦、李爽学、黎子鵬主編○『清代基督宗教小説選注』上下巻台湾・中央研究院中国文哲研究所2018.12
- 呉 岩○論中国科幻小説中的想像『中国現代文學研究叢刊』2018年第12期(総第233期) 2018.12.15
- 劉德隆、劉瑀編著○『劉鶚年譜長編』上海交通大學出版社2019.1
- 陳 春燕○鬼神幻想中的欲望書写——晚清小説《醉茶志怪》中的異類恋分析『明清小説研究』

2019年第1期(総第131期) 2019. 1. 15	……譚光輝
樊 宇婷○周瘦鵬訳<欧美名家短篇小説叢刊>書名、 初版時間考辨『中国現代文学研究叢刊』	伝統文学観念与外国小説の近代接受…程華平+程華林 論晚清小説“妓女”与“貞女”形象的并置現象
2019年第1期(総第234期) 2019. 1. 15	……劉 堃
邱 雪松○製造“新青年”:“五四”前後の鄭振鐸 『中国現代文学研究叢刊』2019年第2期 (総第235期) 2019. 2. 15	論近代日報小説 ……陳大康 曾樸和的<孽海花> ……任訪秋 論<小五義> ……譚正璧
賈 立元○鏡与像:<新石頭記>与吳趸人的觀看之 道『中国現代文学研究叢刊』2019年第3期 (総第236期) 2019. 3. 15	從<九命奇冤>的表現特色看它在文学史上的地位 ……王俊年
靳 文鑫○【書評】日本学者追溯底本, 著書澄清“林 紆冤案”『中国出版伝媒商報』2019. 3. 27 電字版	從<三俠五義>談俠義人物——給一位青年朋友的復 信 ……鄧紹基 劉鶚論辨 ……鍾賢培 林紆小説創作簡論 ……張俊才
阪本ちづみ○『張恨水の時空間——中国近現代大衆 小説研究』勉誠出版2019. 3. 29	論老殘 ……関愛和 <孽海花>与中国歴史小説模式的現代転変…楊聯芬
日野杉匡大○蘇曼殊と崖山——『断鴻零雁記』に流 る亡国の悲しみ『野草』第102号 2019. 3. 31	<風月夢>与青楼小説 ……韓 南 <海上花列伝>: 現代通俗小説開山之作 ……范伯群
大東和重○中国人日本留学生の文学活動——清末か ら民国期へ 研究の現在『野草』第102号 2019. 3. 31	再說“荊生”, 兼及運動之術 ……陸建德 民国初年“旧派”小説家の声音 ……黄 霖 官場与民俗——譴責小説研究 ……林 崗 晚清“翻新”小説綜論 ……欧陽健 実録与評論: 晚清陸士諤社会小説論 ……王学鈞
関愛和主編『中国近代文学論文集・小説卷(1980- 2017)』	從公案到偵探——論晚清公案小説的終結与近代偵 探小説の生成 ……苗懷明
蘇州大学出版社2018. 10	蛻変中的蝴蝶——論民初小説創作的價值取向 ……湯哲声
序 ……関愛和	江南士風与狭邪小説 ……侯運華
前言 ……関愛和	清末民初小説与報刊業之關係探略 ……郭浩帆
略近代小説の歴史分期及其特点 ……侯忠義	清末民初京旗小説引論 ……劉大先
晚清小説理論發展新段階的一個標志——晚清革命派 關於小説与社会生活關係的論述 ……顔廷亮	鴛鴦蝴蝶派作家与市民社会 ……劉鉄群
試論近代小説の興盛与演變 ……裴效維	中国偵探小説の發生及其意義 ……任 翔
“史伝”“詩騷”伝統与小説叙事模式的転変——從 “新小説”到“現代小説” ……陳平原	晚清“新小説”辨義 ……夏曉虹
外国小説与清末民初小説芸術の近代化 ……王祖猷	
稿費制度的確立与職業作家的出現——二十世紀中国 文学發生論之一 ……欒梅健	
魯迅和周瘦鵬 ……郭長海	
試論晚清小説読者の變化 ……袁 進	
“詩界革命”和“小説界革命在天津” ……張宜雷	
重新認識中国近代小説 ……郭延礼	
晚清小説中的疾病隱喻与中国小説の現代化進程	